

成・壽

SEIJU

2010年
第41卷

春考号

善吉祥天

沙野
三善
三善







■ 特
集

成寿山善光寺
三世大莞博志住職晋山結制
大圓武志大和尚七回忌法要

平成二十二年十一月二十七日・二十八日

首座入寺式



首座（修行僧のリーダー）という、結制修行の重要な役に選ばれた僧の任命式
（首座 黒田賢志師）



知客（案内役の僧侶）に連れられ、聖僧（文殊菩薩）様に焼香礼拝をし、僧堂内にいる大勢の僧侶に挨拶をして廻ります

土地堂念誦



結制修行の無事と檀信徒の皆様の繁栄を祈り仏法の護り神、土地護伽藍神に蜜湯とお茶を捧げます

湯献忌先住



七回忌前晩のご法要 焼香師（導師）正翁寺住職 篁 素明老師

配役本則行茶



結制修行される僧侶の配役を発表する式
本則（修行のテーマ）を提唱される光真寺住職 黒田俊雄老師

安下処



安下処（あんげしょ）とは寺に入る前に住職が身支度を整える処
鳥居秀行総代宅を安下処として、ご尊家のご先祖様に感謝報恩のお経を手向けます
これよりいよいよ出発です

晋山・稚児行列



早朝より天童に扮したかわいらしいお稚児さんたちが新命住職を先導して参道を練り歩きます

晋山・稚児行列



100メートルを超える行列。みんな和やかにお寺へと歩みます
お寺に着くとお稚児さんは無事育成・身体健全を祈念して洒水（しゃすい）を受けます

晋山式



角塔婆の建つ山門で法語を述べ太鼓の音と共に本堂へと進む



御開山さまから伝わるお袈裟（伝衣）をかけて、ご本尊さま、土地神、達磨大師、御開山さまにそれぞれ法語を述べ就任の挨拶を致します

結制（晋山）上堂



新命博志住職が須彌壇の上に登り法語を述べ焼香します。
お釈迦さま、御開山さま、ご縁の方への報恩の誠を尽くし、世界の安心・平和・幸福、
仏道の興隆、檀信徒各家の繁栄を祈念します。
続いて大勢の僧侶と禅問答を展開



嗣承香（しじょうこう） 師父に対し万感の思いを述べて焼香致します
嗣承香焚いて泣かざるは仏子にあらず……



西堂（白槲師・びゃくついでし）黒田 俊雄老師
先住の法をしっかりと継いだ新命の力量を認めこの上堂を証明致します

首座法戦式



住職に代わり仏法を説くことを許された首座 賢志上座が弾けるような声で修行僧と問
答を戦わせます



先代方丈さまの肖像画は実弟 黒田能勝先生によるものです



先住七回忌献供諷經



焼香師（導師）大乘寺山主東隆眞老師

法語

單刀直入至誠人

忍苦多年轉願輪

七回春秋既過去

如今佛看旧時身

恭惟相值

当山二世中興善光寺留学僧育英会創設者

初代理事長大圓武志老大和尚休広忌之辰

拙僧

大練忌之辰焼香云

与老大和尚 結兄弟之契五十年

友情丹心 猶在眼

朗朗大声 今残耳

現在然

扱 老大和尚者

修兩本山僧堂 投身泰米国道場

開創善光禅苑 宣揚一仏兩祖宗



檀信歸崇教化 門徒一萬絕比倫

遺弟博志老和尚 受遺命寺門興隆

可謂

正伝仏法弥昌 尽未來際久転

正与麼時 応供底一句

如何指陳

唵

拈華瞬目 露堂堂

破顏微笑 明歴歴

尚亭

維時 平成二十二年十一月二十八日

加賀 東香山大乘寺七十二世

焼香比丘 天籟隆眞拜書

釈迦殿一階（客殿）



本堂に入りきれない程大勢の方にお参り頂きました

大駐車場



大駐車場に大きなテントを張りモニターを見ながらゆっくりとお参りして頂きました



参詣頂いた多くの方々のご焼香

大般若祈祷法要



檀信徒各家のご先祖様のご供養と共に身代不動明王さまに皆様の益々のご健康・家門の
繁栄をご祈念致します



横浜駅 崎陽軒にて祝宴設齋





祝宴には先代方丈さまの在りし日の映像がながされ、先代様からも『ありがとうございました』と感謝の声が会場内に響き渡りました。



謹啓

春暖の候、御一統様には益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。
さて、今回善光寺季刊誌「成寿」第四十一号をお届けいたします。

この号は特に晋山結制並びに大圓武志大和尚七回忌のご報告と、横浜善光寺
留学僧育英会辞令交付式を特集致しました。

ご高覧頂ければ幸いです。

皆々様のご健勝をお祈り申し上げますと共に今後とも尚一層の御法愛、
御教導賜りますよう何卒宜しくお願い申し上げます。

謹白

平成二十三年三月吉日

横浜善光寺 住職 黒田博志 合掌

カラ	―	■晋山結制・大圓武志大和尚七回忌法要	1
特	集	●晋山結制・大圓武志大和尚七回忌法要	25
		ご挨拶 祝辞・祝電	
インタビュー	■	晋山式を終えて博志住職に聞く	36
法	話	●住職法話「お不動さまに導かれ」	40
		黒田 博志	
読	物	●「供養の心」について	50
		佐々木宏幹	
連	載	●『普勸坐禅儀』に学ぶ その五	67
		安藤 嘉則	
法	話	●牛に引かれて善光寺参り	74
		前平 武男	
カラ	―	●開山三十三回忌・第二十四回育英会辞令交付式	85
特	集	●育英会辞令交付	89
		●善光寺霊園ニュース	96
		●坐禅会・写経会のお知らせ	110
		●ニュース・アラカルト	116
留学僧募集のお知らせ	128	読者のたより	130
		編集後記	138

巻頭言

善光寺住職 黒田博志

仏教を通して「仏法興隆、世界の安心、平和、幸福」に貢献したいという旗印のもと、成寿山善光寺は開創四十二周年、又、開創十五年を記念して設立した『善光寺海外留学僧派遣育英会』も寺檀一体の結晶として二十七年目を迎えるに至りました。これもひとえに大恩教主本師釈迦牟尼佛、高祖承陽大師、太祖常濟大師、歴代祖師方の尊い御徳の至らしむるところ、そして、善光寺を護り仏道を行じてこられた数多くのご縁の方々のおかげでございます。師父は三つの理念を頭上に

戴き一徹微動だに揺るぎもなく今日に至っております。

一、祖師を通して釈尊に還る

二、仏道を通して世界の安心、平和、幸福に寄与する

三、利他の思想で発願利生

師父遷化より六年、私もこの三つの理念を頭上に法燈を継承して参りました。

いかんせん師父の突然の遷化は私をして久しく戸惑いの中にあり、唯唯遠きを追いつながら、師父の行いを観、志を追懐しながら日常の諸事に一所懸命尽くすのみでございます。

精進の覚悟気概はありまして未熟は否めません。仕方ありません。時間をかけ少しずつ積み上げて参ります。師父の口癖「すべて仏さまにお任せ下さい」

この言葉を心に仏さまと会話する毎日です。

山高月上遅（山高うして 月の上ること遅し）

一歩ずつ、一歩ずつ仏さまに導かれ、多くのご縁の方々に護られ、支えられて今日の私があります。

奇しくも三十八年前の同月同日に師父も晋山式を勤めております。仏さまに導かれ、多くの御寺院さまに助けられ、檀信徒の皆さまに護られながら晋山結制も無事円成することができました。まことにありがとうございます。

私は、まだまだ若輩でございます。今後ともご指導ご鞭撻の程何卒よろしくお願い申し上げます。

成寿山善光寺

三世・黒田博志住職晋山結制

大圓武志大和尚七回忌法要

平成二十二年十一月二十八日、善光寺で第三世黒田博志住職の晋山結制並びに大圓武志大和尚七回忌法要の盛儀が執り行われました。二世中興大圓武志大和尚の遺志を体して第三世を継承した博志住職が先代大圓大和尚の七回忌に際し、成寿山善光寺住職として檀信徒に就任を披露しました。

新任職の晋山行列は、かわいらしい衣装の稚児たちを先導にして午前八時に港南会館を出発し、善光寺へ向かいました。

釈迦殿前で晋山の第一声を発した博志住職は、釈迦殿に上殿し、まず御本尊さまに新任のご挨拶をし、結制 上堂（修行僧が集結——仏さまの定められた制度に従うという意味）の盛儀に臨みました。

晋山式を見守る西堂は本寺である栃木県大田原市の光真寺ご住職黒田俊雄老師、後堂は大圓武志大和尚と同級生の法友、金沢市の大乗寺山主東隆眞老師。

釈迦殿は、関係のご寺院、檀信徒総代、先代の頃からご縁をいただいている縁者や親類の方々が随喜し、博志住職の一挙手一投足を見つめる中で、結制上堂、首座法戦式、先住七回忌法要、大般若祈祷法要と重儀が次々に行われました。

新任職として仏の座である須弥壇の上に登った博志住職は、大恩教主本師釈迦牟尼仏、高祖承陽大師、太祖常濟大師、開山棟庵白純大和尚、



さらに總持寺前副貫首斎藤信義老師、先代の法友であった山形保春寺住職大八木春邦老師に感謝報恩の香を手向け、また檀信徒の皆さまの家门繁栄を願い、そして父であり師匠である大圓武志大和尚への報恩の香を焚き、法語を唱えました。

この後、問答を展開した博志住職は、自らに課して「年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず」と信念を吐露し、次々に質問をしかける僧に警策をかざし、やさしく厳しく明快に応酬。「すべて檀信徒の皆さまのおかげ」「先代からは何も動ずることのない心を受け継ぎたい」と決意を吐く。

父母の恩の重きこと天の極まりなきが如し。師父大圓武志大和尚への報恩の思いでしばし絶句する場面もありました。随喜の僧侶も檀信徒の皆さまも一様に博志住職の雄姿と在りし日の

先代の面影とを重ねてもらい泣きする場面もあり、感涙に濡れる晋山式となりました。

法戦式では、善光寺徒弟の黒田賢志上座が首座の役に就き、「達磨廓然」の公案をもとに堂々の問答をくりかえしました。

西堂の黒田俊雄老師は、若き博志住職と賢志首座に「すりこぎは身を削って、ろうそくは身を燃やして人の役に立つ。僧侶もかくの如し。これより更に心を合わせて報恩の行に邁進してほしい」と語りかけるように慈しみ洋々たる前途を激励しました。

この後、大圓武志大和尚の七回忌法要が大乗寺山主東隆眞老師の導師で営まれ、また檀信徒各家のご先祖供養と、身代不動明王に皆さまの健康と家門繁栄を祈念する大般若祈祷法要が博志住職導師により厳修されました。

そして最後に新命住職と筆頭総代・熊谷豊太郎氏の挨拶をもって無事円成致しました。

善光寺では、晋山式は二回目です。前回は大圓武志大和尚の晋山式、昭和四十七年十一月二十八日、奇しくも同じ日です。

師父大圓大和尚の晋山式には、新命方丈の「生」はなかったこととなります。誕生以来二十八年、或る日突然、師父の遷化に遭遇し、用意と準備のないまま、役割と責任が委せられ途方に暮れることになりました。

以来、遠きを追いながら、兎にも角にも次代を継承すべく師父の「志」を探り、生前どのように行動されてきたのか、それまでの「やりかた」や「しきたり」を探し求め、昼夜を分かつた、仏道に翻弄される刻々。師父の偉大な足跡と事蹟は一朝に修得できる新命の許容量ではなかつたと述懐されます。

しかし新命を待つ檀信徒にすれば一日千秋の
想いでありました。

晋山式と先住七回忌は、師父の導きであり、
決して偶然ではなかったのでしょうか。いよいよ
第三世を継承、謙譲の美徳をほしのままに成寿
山善光寺に立つ新命、まことありがたき不思議
であります。



法要を終えて 実行委員長の挨拶

晋山結制実行委員長 熊谷 豊太郎様

大勢のご寺院さま法友さまのご参加、ご協力により式をおえられたことを御礼申し上げます。

博志方丈には、心の通う善光寺として人々を幸せに導き、仏教と社会平和のためにご尽力いただきましたと願います。大圓方丈は今日の博志方丈のお姿をご覧になって喜びながら大変安心しておられます。

総代の皆様と

ともに善光寺の興隆を祈っていききたいと思いません。



祝賀会でご挨拶を頂戴した方々



大乘寺山主 東 隆眞老師

武志老師の遺志を継いで山門興隆につとめていただくことを願います。



神奈川県第二宗務所

第五教区教区長

近藤一光老師

山門繁栄を祈念して乾杯。



善光寺護持会会長 国廣 敏郎様

あらためてみほとけの心を深く教えていただいた気がしています。敬愛する博志方丈を支えていきたいと思っております。



光真寺住職 黒田俊雄老師

みなさまのお心によるあたたかい晋山式、七回忌法要が無事おわり、あつく御礼申し上げます。



◇晋山結制式に際しまして、各方面から多数の祝辞、法語、祝電をお寄せ頂きました。ここにご紹介させて頂きます。(順不同)

温かく心のこもった文面の数々

大本山永平寺貫首 福山諦法 様

祝詞

本日の吉辰を卜して晋山結制の式典を挙げらる洵に慶祝の至りに堪えません

惟うに 晋山開堂は寺門の大典であり九旬安居の結會は佛祖の軌範とするところ我が宗門の宗旨ここに始まり人類無上最深の文化これに依りて興るといふべきであります

冀くは曩祖の垂範に従い綿密なる行持と卓絶した教化とに依り普く無縁大悲の法門を布き齋しく單伝自覚の正法を弘められ貴寺の檀信徒はもとより国家社會の要請に應えられんことを祈念

して祝詞と致します

大本山總持寺貫首 大道晃仙 様

祝辞

本日茲に吉辰を卜して善光寺晋山結制の式典を修行さるるの勝縁洵に慶祝の至りに堪えません

貴寺は由緒深く歴代よく宗門の伝燈を護持して両祖大師の宗風を昂揚し地域社會の福祉と人心の安寧に貢献されて來ましたが新命宗師には道行綿密にして正法の興隆、寺門の經營檀信徒の教化に邁進され將來を期待さるる宗師であります

今茲に山門頭高く法幡を翻し佛祖正傳の佛法を宣明して萬世の太平萬民の和樂を祝祥されましたこと等しく感激するところであります

本日の盛儀に際し寺門の繁榮と宗師の愈々の活躍を祈念し特に專使を派して深甚なる祝意を

表します

曹洞宗神奈川第二宗務所所長

石田征史 様

祝 辞

本日茲に、吉辰を卜して晋山開堂の式典を挙行されるに當たり神奈川第二宗務所管内寺院を代表して心より祝意を表します。

貴師は、平成十七年一月ご當山住職に就任以來、良く曹洞宗の伝灯を護持し高祖道元禪師、太祖瑩山禪師の宗風を拳揚して、常に地域社会の福祉と人心の安寧に貢献されてまいりました。

御承知の通り、御當山は先代故黒田武志老師が新寺建立されたお寺であり、貴師はその跡を継ぎ善光寺季刊誌「成寿」の発行や横浜善光寺留学僧育英会の運営にも尽力されています。

また道念厚く、大本山永平寺での修行に加え、タイのワットパクナムやアメリカのロサンゼルス禅センター、ドイツ普門寺などの禅道場でも修行をされ、今後の曹洞宗を担う若手宗侶の一人として多方面で御活躍されています。

この度、檀信徒の輿望を担って晋山開堂を修行され、佛祖の慈恩に報答されましたことにお慶び申し上げます。

茲に本日のご盛典に際し寺門の興隆檀信徒の家門繁栄と貴師の益々のご活躍を祈念し祝辞といたします。

【祝電】

大本山 總持寺

貫首 大道 晃仙貌下

副貫首 江川 辰三様

西堂 松田 文雄様

監院 横山 敏明様

晋山結制の盛儀に當たり心より祝意を表します。

☆ ☆ ☆

神奈川県東部嶽山会会長 宗澤文良様

晋山結制上堂の御隆儀を心から御祝い申し上げます

法燈益々の御興隆を祈念申し上げます

☆ ☆ ☆

神奈川県東部總和会会長 菅原節生様

ご盛典を祝し 寺門の興隆と益々のご活躍を祈

念申し上げます

☆ ☆ ☆

曹洞宗神奈川県青年同志会様

御盛典を祝し、寺門の興隆と益々の御活躍を祈

念いたします。

☆ ☆ ☆

即心会 一同様

晋山結制を祝しますとともに、貴山の益々の御

発展を御祈念致します。

☆ ☆ ☆

神奈川県第二宗務所 所長 石田征史様

御盛典を祝し御老師の益々のご活躍を祈念致し

ます。

☆ ☆ ☆

玉泉寺 海外留学僧 沖田玉映様

晋山結制おめでとうございます。益々のご活躍

を期待しております。

☆ ☆ ☆

曹洞宗宗務庁人事部長

宗興寺住職 中野重哉

ご盛典を祝し、益々の山門興隆、益々のご活躍

をご祈念いたします。

☆ ☆ ☆

ドイツ大悲山普門寺 中川正寿様

晋山の盛儀、心よりお祝い申し上げます。

From: Ingrid Appels **To:** Jun-Sama
Sent: Saturday, November 27, 2010 2:26 AM
Subject: Shinsanshiki Ekyo

To Rev. Hiroshi Kuroda;

Our warmest congratulations on the occasion of your Shinsanshiki. May your Mountain Accession be auspicious and the Zenkoji sangha prosper and grow under your guidance.

Deepest Gassho,
 The Maezumi family,

Ekyo, Michi, Yuri and Yoshi

From: Ingrid Appels **To:** Jun-Sama
Sent: Saturday, November 27, 2010 2:49 AM
Subject: Shinsanshiki Shugetsu (please throw away my first)

Dear Rev. Hiroshi Kuroda,

From Oranda, we send you our warm-hearted congratulations for your Shinsanshiki.

May Zenkoji, your sangha and your family enjoy blossoming times under your wise guidance.

Omedeto gozaimasu!

Deep Gassho,

Tenkei Roshi, Myoho Sensei, Shugetsu

From: Ingrid Appels **To:** Jun-Sama
Sent: Saturday, November 27, 2010 7:05 AM
Subject: Shinsanshiki Genpo

Dear Hiroshi Kuroda,

Congratulations on this wonderful occasion of Shinsanshiki from all of us here at Kanzeon Sangha.

Love,

Genpo Merzel

送信日時:2010年11月27日(土)2時26分

黒田博志様へ

晋山式の慶賀に、心よりお慶び申し上げます。

山門の上当り、善光寺一山の皆様が、新命方丈様のお導きにより、ご発展なされますよう祈り上げます。

心よりの合掌

前角一家、慧鏡 光代、純道、嘉美より

送信日時:2010年11月27日(土)2時49分

黒田博志老師へ

オランダから、晋山式に当たり深甚よりお祝い申し上げます。

善光寺とお檀家様、またご家族の皆様、貴方様の知恵あるお導きにより花咲くような美しいこの時をお慶び申し上げます。

おめでとうございます!

心からの合掌、

コペン天慶老師、妙法先生、秋月より

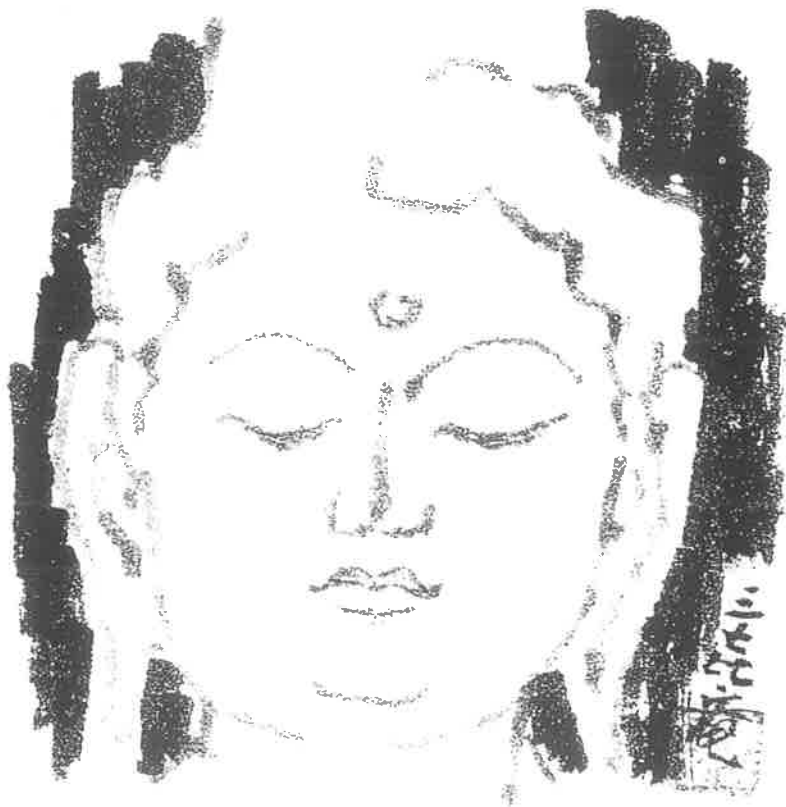
送信日時:2010年11月27日(土)7時05分

黒田博志老師へ

このたびの素晴らしい晋山式に当たり観世音サンガー同心からお慶び申し上げます。

玄法マーゼル老師より

訳: 桐ヶ谷寺住職 黒田純夫老師



黒田博志住職に聞く——晋山式と大圓武志大和尚の七回忌を終えて

善光寺二世中興大圓武志大和尚の跡を継承し、昨年秋に善光寺三世として晋山式を挙行。併せて大圓武志大和尚の七回忌法要を厳修した黒田博志住職に、晋山結制並びに先代の七回忌を終えた心境を語っていただきました。

「ゼロからの出発」を決意して善光寺を創建。「世界平和のために尽くす」ことを誓って善光寺留学僧育英会設立以来休むことなく続けられた大圓武志大和尚の遷化という大きな悲しみから七年の歳月を経て、晋山の盛儀に臨んだ博志住職。「先代の後ろ姿を見て学んできた」と心境を語る。そして住職としての新しい役割と責任の重さを改めて噛みしめておられました。

すべては檀信徒の皆さまのおかげ

師匠の後ろ姿に学んできた

◆晋山式と先代の七回忌という大きな節目を越えられて、今どんな心境でしょうか。

黒田住職 ホツとしたのと同時に、改めて住職としてしっかりお勤めしなければと責任を感じています。



師匠が亡くなった直後は驚くばかりで、自分が住職の立場を継ぐことなど考えてもみませんでした。大事を怠っていたと思います。どうしようかと思いつながら、先代はどうしていただろうか、私を見てきた先代の姿や日々言われたことを思い出しながら、先代の心を心として務めることができばと思ってきました。

子どもの時はうるさい親父だと思っていました。六人兄弟で、誰かがいたずらをすれば、連帯責任で外へ並ばされたり、本堂へ座らされたりしました。二十歳で僧侶になってからも、しよっちゅう叱られました。いま思えば有り難いことです。

先代は神仏への畏敬の念、当たり前ですが、信仰心の強さは別格でした。少しでも見習おうと、私も毎朝の坐禅とお勤めは欠かしません。先代のことを思い出しながら、本堂や寺じゅうをお祀りしたり、読経をして過ごしています。

どんな時でも一時間半のお勤めになります。

はや七年経ちましたが、正直、やっていけるという気持ちより、やらないわけにゆかないという気持ちの方が大きいのが実感です。

◆育英会の再開を決断されたことにも、ご住職としての覚悟がうかがえますが。

黒田住職 先代が亡くなる前に、二人で歩いている時、「博志、オレはなあ『仏道を以って世界に貢献出来る人、人材の育成が信念だ』だからどんな事情があっても育英会だけは続けてゆきたい」と言われたことが心に残っています。しかし、私にできることはありません。派遣環境はきびしく、まず資金、そして派遣先環境整備、すべては皆さまの浄財によって賄われる育英会。先代に集められても、私には集まりません。すぐには難しく少し休ませざるを得ず、漸く一昨年から再開しました。

すべて先代のおかげです。先代にうまく導かれていたような気がいたします。先代は私に素晴らしい人たち、人材を残してくれました。先代のご縁で、役員に宗門のそうそうたる方々、また本寺さん、総代さんにも加わっていただいています。これひとえに先代のご人徳、私はその余徳をいただいています。先代がいかに皆様方のために尽されたのかがわかります。すべてそのおかげです。

「世界平和のために」を使命として

◆善光寺の使命、また今後の展望についてどうお考えですか。

黒田住職 先代は夙に「世界平和のために尽す」という大義でした。いま私に出来ることは、檀信徒の皆様のために仏さまの教えをお伝えして、心の安らぎを得ていただくお役に立てれば

というその一念です。そのような思いで日々務めていきます。

これからも、先代のやったことはそのまま総て、変えることなく勤めていきたいと思っています。

坐禅を通して人々に安心を与えたい

現今、周囲は必ずしも、心身共に健全であるとは申せません。そういう方々に対し役立ちたいと思っています。そのためにはまず出来ることから寺のいろいろな行事を通して殊に、坐禅を以って、仏さまの教えをお伝えしたいと思います。

皆様には、住職が代わっても変わることなく善光寺の行事にたくさん参加していただいています。とても有り難いことです。

そのお一人お一人が「先代さんによくしてい

ただきました」とおっしゃいます。私も、檀家さんに慕われる住職になりたいと思います。否、なります。

まだ私は三十五歳。二十歳で僧侶になり、五年間は大本山での修行、海外、タイ、アメリカ、ドイツに修行に行かせていただきました。どこへ行くにもはじめは師父に連れられ、その後ろ姿を見て参りました。

いつでも、私の前には師父がいて、一所懸命追っかけて来た思いが致します。すでに師父の中には早くから「私のいまの現実を慮って」順々に歩く道を教えてくれていたんだと思わずにおれません。

今後も、師父の心を心として、仏道に邁進して参ります。

■平成二十三年二月三日
善光寺 節分追儺法会にて

お不動さまに導かれ

善光寺住職 黒田博志

おはようございます。早々当山のご参詣ありがとうございます。今日は節分です。きのうまではほんとうにきびしい寒さ、しかし今日は辺りもなにやら春らしく暖みを感じます。三寒四温の時節でしょうか。さて節分とは、季節を分けると書きます。

四季折々と申します。立春、立夏、立秋、立冬。一年の巡りは四回です。それぞれの前日を節分といい、殊に二月三日の節分は厳寒の冬から春意が動き、暖かく花が咲き誇るとも穏や

かな季節に移ろう一年で最も大きな変わり目です。旧暦では今日が大晦日。いわゆる冬が終わり明日から新年になる旧正月のはじまりです。この節目に因んで一年間の邪気や厄払いをする特別な日。文字通り明日から春が立つ立春です。善光寺ではこの節分会というのは特別な法要です。

師父は昭和四十四年十一月にこの地に参りまして、発願利生、それこそゼロからの出発、最初に勤めた行事が翌年二月三日。節分会だった



というのです。

それから数えて今年は四十二回目の節分です。

師父が遷化して私が住職として初めて導師を勤めました法要も六年前の節分。巡り合わせは不思議です。昨年十一月二十八日晋山結制を円成し、法灯を継承することになりました。いまだ器ではありません。唯々微力ながら、不惜身命、より高く精進の決意です。ひとまず大きな行事を終え、ホッとしておりましたところ、口べたな東郷総代さまより、「これよりのち一年、寺のいかなる行事も新命方丈の法話をもつておすすぬめ願いたい、他に頼るものではございません。決していいお話を期待している訳ではございません。どうぞ笑われ、失敗し、恥をかき、汗をかいて下さい。格好つけないで下さい。あるがままに仏さまのお話を聞きたいのです」と言われたのです。

私は申しました。「私の話を聞いて助かる人はおりません」

総代応えて、「その通りです。しかし、お話しした住職が救われます」自分を尽くすことは、他を救うに非ずして己助かると悟ること、肝心です。考えるいとまもなく、説得され承知しました。この一年仕方ありません。恥をかき、苦しんで参ります。皆さま、どうぞ耐えて、忍んで、私を救って下さい。ご参詣が少なくなることを案じています。(笑い)

晋山式が行われた日は、二十八日です。善光寺にとつて二十八日という日は、お不動さまの縁日。とても特別な日です。

寺の守り本尊はお不動さまです。奥の院を不動殿と申します。そのお不動さまについて少しお話をさせていただきます。

師父とお不動さまとのご縁は師父がまだ学生

の頃。

五反田の桐ヶ谷寺というお寺に下宿しておりました。その近くにあの有名な目黒不動尊。師父はそこに日参していたというのです。

「世界中に仏道を広めたい。私を遣わせてください。そのために私は一所懸命勉強します」と願をかけていたそうです。

總持寺での修行中、永平寺で研修があり、その帰り道のこと。永平寺駅舎で見かけた仏像。その仏像に吸い込まれるように駅長室へ飛び込み尋ねます。

「この仏さまはどなたが彫ったものですか」
「彫り師のお方はどちらにお住まいですか」

すると「すぐ近くにお住まいです。山口元董さんという仏師の方です」

矢継ぎ早の質問とあの行動力です。すぐその足で訪ねたそうです。

「ごめんください」



初老の彫り師に向かい、「駅舎にひかり輝く見事な観音さま、拝見いたしました。もしも叶うなら、同じ「一葉観音」さまを私にも彫っていただけませんか。ご仏師でなければ彫ることのできない尊い仏さま」

師父の迫力に呆気にとられた仏師。ふたつ返事で了承頂いたというのです。さらに「私はこれから、インドにお釈迦さまを訪ね、タイでは上座部仏教で修行致します。どこでも携帯できるようにお願いしたい」

師父は当時二十五歳。この年にして、いまだ自分のものとして残るものがない。もしも、自分が万が一の場合、この観音さまだけは父母の懐に帰ってこれるようと思ったそうです。この話を聞かされたのは、奇しくも私が二十五歳の時でした。

師父はきつと、私に大事なことを伝えたかったのかもしれない。しかし当時の私は単なる

由来としか思いませんでしたこの縁起。私が生まれる十四年前の出来事。大事を大事と思わぬ未熟もの。いまは師父の思いに胸が痛みます。

師父の功德菩提心と善根の偉大さを垣間見た瞬間でもありました。

こちらの頼みがひと段落したころ、仏師の方は師父の顔をじつと見据えて「あなたさんに頼みがある。私の手元にあるいまひとつのお不動さまを守って頂きたい」素晴らしいながら傍らにある桐の大箱からお不動さま一体を差し込まれたそうです。

「随分前のことだが私はお不動さま二つ彫った。一つは、日本有数の鉄工場の社長さん。その人はまさに日本一になった。いまひとつこのお不動さま。つい一昨年、四国の或る霊媒師の方が来て『福井の山の奥に大きな寺がある。その門前に靈験あらたかなお不動さまが鎮座しているからお迎えしなさい。というお告げがあった』

というんですね。求められるほどに、なぜかその気になれなくてね。それから電話がなんどかあったが、手許から離れない。欲しい人にあげればいいのだが、でもそれ以来どうも気になってしまっただけ。今日、あなたを見てピンと来た。このお不動さまはあなたを待っていたんだよ」まことに不思議な縁。仏像が人を選ぶ。そういうこともあるんですね。

私にとって師父は鬼の不動明王。父のどがお気に召したんでしょうね。(笑い)

間もなく父は、外国に修行。寺が整わない間、本寺光真寺にてお祀り頂いていたそうです。帰国後師父が善光寺を興すと、光真寺住職である長兄の黒田俊雄老師が『これは武志の仏さまだから』と自らお不動さまを抱えて善光寺にお移しされ、奥の不動殿に鎮座なされたといひます。善光寺のお不動明王さまは、燃えさかる炎を背に強いご意志と熱い心と智慧で私どもを仏道

に導いて下さる衆生の救世主。

二十八日はお不動さまのご縁日。日々、月々、早朝より「のうまく・さんまんだ・ばざらだ・せんだまかろしやだ・そわたや・うんたらた・かん・まん」とお勤めをさせていただいております。

このご縁の深い十一月二十八日。私もまた晋山式を迎える事が出来ました。

当日は、まさに小春日和といった陽気。

まだ薄暗い朝五時。大勢の方をお迎えする為に駐車場に大きなテントを張って、お手伝いの方々が準備をして下さいました。門前の石材店ではお店を開放して湯茶の接待から、洗面所までご用意下さいました。

様々な不安は全て総代・役員始め山内のスタッフ、設営から受付まですべてお任せした統括の(株)板橋さま。法要を全て統括進行頂いた教区のお寺様。御随喜賜った御寺院様。地元の皆様。

朝早くからご参詣頂いた多くの檀信徒の方々のお気遣い、お心遣いに救われ、すべてが障りなく予定通りに進行いたしました。

檀家総代である日野石材店組合理事長、鳥居家を安下処とさせて頂きました。身支度を整え、ご先祖さまに供養のお経。お茶をいただき準備万端。行列の出発点、お稚児さんの待つ港南会館へ。

四十名のお稚児さんが賑々しく、色艶やかに、すでに身支度を整えて待っていてくれました。

行列の露払いは地元の石材店の社長様方。長い竿に旗なびかせてお稚児さんとその保護者の方々。これだけで百名を超えます。総代の皆さまが提灯を持って先導して下さい、私は大傘を被り沿道の声援に心えながら三〇分の行程で、ふと参勤交代もかくの如しであったのではと思ったりもしました。

日頃慣れ親しんだ参道ですが、晋山での一歩



一步はズッシリと重いものに感じました。事新たに師父に導かれ成寿山善光寺に入るんだなどという熱い想い、同時に住職としての気概と使命感が沸いて参りました。

ようやく無事に山門に到着しました。山門といってもご存知の通り善光寺には山門らしきものはありませんので、花壇沿いに俄楼閣を設え山門に見立て、法語を述べさせていただきました。

この善光寺の門はいつでも分け隔てなく広く広く開放されております。

これからお役に立てるように尽くして参ります。

どなたもいつでもどうぞお参り下さい。

当寺山門に角塔婆が建っています。晋山結制を鑑み、その供養のため祈願と誓願を込め、ひ

とつには先住の七回忌追善法要と、この山がこの寺がこの僧が積功累徳仏法が永遠のものであるようにと東西南北それぞれに示しております。

まず正面には

大圓鏡智 山門茲勤修晋山結制奉為當山二世中
興大圓武志大和尚七回忌報恩高顯

文字通り先代住職七回忌に因み恩に報いん為
晋山結制を勤めます。と示しております。

その右側面には、

成所作智 銘曰 歴世營々護法城 積功累徳正
円成 徳不孤而必有鄰 晋山須積功千鈞

お釈迦様より二千五百年代々途絶えることなく
続いている仏法を護り、すべてのご縁の方々
は功を積み徳を重ね今、まさにここに仏法は現
前としております。そのお徳を慕い、多くの方
が四方より善光寺に集い、晋山結制に因み、皆

様とともに功德を積み、仏法が栄えますように。

その左側面には

平等性智 経曰 無垢清浄光 慧日破諸闇 能
伏災風火 普明照世間 悲體戒雷震

観音経より。仏さまの曇りのなき清浄の光は
諸々の闇を照らし、世間の災いも苦しみも普く
救ってくださいます。仏さまの授けてくださる
戒は雷のように大きな力を持ってお守りくださ
います。

裏面には

妙觀察智 維時 平成二十二年十一月二八日成
寿山善光寺三世大莞博志恭敬謹誌

善光寺第三世博志新命は晋山式を勤めるにあ
たり、誓願をもつて善光寺の住職として檀信徒
の皆様方を敬い慎み、之に服して参りますと誓
つたものであります。

この度の晋山式を挙行するに準備期間一年有
余。多く方々のご尽力のおかげで、無事勤める
ことができました。わけても師父と母が築き上
げてきた草創期のご苦勞を思うとき、この未熟
な私、どのように恩に報いるべきか。尽くして
も尽くしても足りない情念に駆られます。

奇しくも三十八年前、昭和四十七年十一月
二十八日。この年、この月、この日、この刻に
晋山式が執り行われています。

これからも師父の後を追い続け精進をして参
ります。

最後になりますが、有名な父母恩重經という
經典の一説「父母の恩重きこと天の極まり無き
が如し」とあります。このテーマはまだ私生涯
の課題です。

節分会のお話を進めて参りましたが、思わぬ



方向に行ってしまった。それでもあらためて師父に足りなすぎる自分を見ることができました。

次回はもっと成長致します。

今後ともお引き回しいただきますこと、心よりお願いを申し上げ本日のお話とさせて頂きます。ご静聴いただき誠にありがとうございます。

※不借身命…仏法のためには命を惜しまず尽くす。

(法華経)



「供養の心」について

駒澤大学名誉教授 佐々木 宏幹

◆「ご先祖さま」と「仏さま」

数年前に東北のある県で、観音さまの像を造り、開眼式を行ないました。開眼は魂入れとも言って、仏さま、観音さまの命を入れ、拜む対象にします。儀式が終わってから、ご先祖の供養をするので、たくさんの方が集まり、お塔婆をお願いします。

折悪しく十一時から始まる法要の前に、にわか雨がやってきました。東北のにわか雨ですから、曇ったかと思ったらザーツときた。女性の

方が多くいましたけれども、さあ靴を脱ぐ場所が混雑します。どうなさるだろうと見ていると、お寺の方ではビニールの風呂敷や傘入れを出して下さった。ところが靴を脱ぐだけで大変ですから置く場所がない。すると皆さん、あそこへ行きましょうと言って歩き出した。

どこへ行くのかと思っていたら、みんな傘や包みやハンドバックを持って、お寺の後ろに向かいました。そこには大きな位牌堂があります。納骨堂も兼ねていますから、数多くのお位牌の



ほかに、まだ埋葬しないお骨も何点がある。お位牌は日本海岸のお寺の特色で、お厨子に納められている。お厨子には家紋が入り、彫刻が施され、
○家先祖代々精霊とあって、あとは○○信士とか信女とあり、引き出し式になっている。こういうお位牌が金ぴかにズラリと揃っている。

その真ん前で、雨で濡れたようなものを前に置き、皆さん方が手を合わせて口にした言葉に感動しました。

「仏さん、法要が終わるまで取って下さい」。

「取って下さい」というのは「取っておいて下さい」という東北弁です。中には「ご先祖さん、どうぞこのものよろしくお願いします」と言っていて、礼をしてから別れた。東北の一般の檀信徒の意識というか心は、こういうものです。

つまり、家族の仲のいい人にしゃべると同じ表現をしている。家族に対して、仏さま、ご先祖さまとはこの世では言いませんから、ご先祖さまは違う所におわすけれども、決して遠い存在ではない。近い存在として手を合わせるという事は、有り難いから手を合わせる。つまり仏さまに近づいている方々である。

ところが、そこには「ご先祖さま」と「仏さま」が両方入っている。日本人の仏心には、「仏

さま」と「ご先祖さま」が重なって心の中に定着しているのだと思ひ、感心しました。

今日は施食会がこれから行なわれます。施食壇に安置される三界萬靈牌は、天地のあらゆるところに存在する靈に供養するものです。

靈と言うと皆さんひつかかるでしょうが、見えないけれども存在すると信じられる人格的存在です。人格は皆さんが持ちだから私の言うことをわかかって下さる。同じように、あの世に行っても、喜怒哀楽の情や心をお持ちである。それを人格的な存在と言っています。

施食会には、三界萬靈のほか、新たに亡くなった新亡諸精靈、檀信徒各家先亡累代諸精靈なども供養します。もう何回忌も何回忌も重ねて、二十三回忌、二十七回忌を迎えた人々もここに集まっていたたく。そして、お釈迦さまのお説きになった有り難い經典をお坊さまたちがみんなて読誦し、集まった靈に対して供養する。

施食棚の真ん中に色のついた幣束のような旗があります。お坊さま方のお経の中に、お釈迦さまから始まって、いろいろな諸仏諸菩薩に来て頂き、三界にいるさまざまな靈、縁がなくて誰も食事を捧げて供養してくれることのないような人々も全部集まれということになると、中心にある信旗にお集まりになる。今日拝む時は真旗が中心になり、諸精靈を供養する。そういう儀式が施食会です。

◆「畏れ」を知らない時代

先日、テレビや新聞で大きく報道された事件があります。広島の中で数ヵ月前まで働いていた人が退職をした。面白くないという気持ちを持っていた。五十歳近い大人です。それが朝、社員たちが通勤してくるところへ車で猛スピードで突っ込んで行き、七、八人跳ねて一人が亡くなった。



まだ小さい子どものいるお父さんが亡くなり、あと二人が重体で意識不明。男は警察で「むしゃくしゃしたから、誰でもよかった。殺したかった」と言ったという。そのモデルになったのが二年ほど前の秋葉原の事件です。あの時も、むしゃくしゃしたから、誰でもいい、やつつけたかったと言っています。これは恐いことではありませんか。

むしゃくしゃしたら、いつやられるか分からないという社会になぜなったのか。そのことが非常に問題です。

その裏を分析していくと、どうも「供養の心」というものが日本人の若者や大人たちから薄れつつあるのではないのかと想像せざるを得ません。私が「日本社会が深刻に病んでいる」と表現するのはそのことです。

現代日本の社会は殺人とか窃盗、詐欺が非常に増加している。歴史を見ると、いつの時代に

もこういう事件はあった。しかし専門の社会学者に言わせると、特にここ五、六年ひどいという結論が出ています。

皆さんは仏教という宗教に縁を持ち、ここにお集まりです。こうした出来事は、仏教徒にとって、とても認められないような問題です。なぜならば、仏教徒には、仏教徒として守らなければならぬこと、してはならない事柄（戒）があるからです。

その第一が「殺すな」です。人を殺すことは、もう仏教徒の資格がない。これを「不殺生（ふせつしよう）」と呼びます。第二に、人のものを盗むな。「不偷盗（ふちゆうとう）」と言います。それから嘘を付くな。「不妄語（ふもうご）」という言葉を使います。これが仏教徒の基本的モラルで、これを犯したとたんに、昔は教団から永久追放をされたと伝えられます。

こんな事件もありました。長崎県の小学六年

生の女の子がインターネットで侮辱されたというので、女の子をひと突きして殺してしまった。長崎県の教育委員会では、由々しい事件だというので、小学校の五、六年生に、死とは何か、殺しはなぜいけないかという特別の教育をなささいということ布達したという。

その時の話です。娘が学校から帰ってきて、「お母さん、なぜ人を殺してはいけないの」と聞いた。まだ四十代ぐらいのお母さんは、「いけないのは決まっているんじゃない」と答えた。娘は「お母さん、答えになっていないよ。なぜと言っているのに、悪いのは悪いでは答えになっていないじゃない」と言った。お母さんは答えられなくなつて、「お前という人は」と言つて怒り狂つたというのです。

横でこの話を耳にしていた七十代のお祖父ちゃんは、「今の若者は畏れを知らないな」とひとこと言ったという。この「畏（おそ）れ」が

宗教的には非常に重大な意味を持つ言葉です。

恐れを英語で何と言うでしょうか。「fear (フィア)」「terrible (テリブル)」という言葉がありますが、この「畏れ」は「awe (オー)」という言葉です。宗教的な、有り難いともつたいないとか、畏れ多いというのが、この「awe」です。前からナイフを突きつけられて恐いという場合は「fearful (フィアフル)」と言うわけです。

祖父ちゃんが「畏れを知らない」と言った、その「畏れ」は、あの世であるとか、大いなるもの、あるいは現実を超えてあるもの、そうした宗教的な力へのおのきです。

「忝(かたじけ)ない」とか「勿体(もったい)ない」という日本語もだんだんと使わなくなりました。「勿体ない」という言葉も日本から消えようとしているし、「忝ない」という言葉も若者に聞いても分からなくなつた。これは、今

までの長い間、大人たちが社会の人間関係をよくするために使っている言葉がだんだんと意味を失ってきたということであり、恐ろしいことです。

「畏れ」とは、大いなるものや超えてあるものへのおのきであり、これが宗教という文化の起源である。宗教がどこから起こったかという、猿から人間になった時に「畏れ」の気持を持つた。オランウータンやチンパンジーは頭がいいけど、そういう「畏れ」を教えても分からない。人間だけが「畏れ」や「あの世」を理解し、「死んだ者も生きている」ということを認識できる。

死んだ者が生きているわけがないというのは科学の理屈です。証明できないから無いという。果たして証明できないものは無いのか。証明できないものもあるんだとするのが宗教や哲学の課題です。このように、宗教の起源は「畏れ多

い」とか「勿体ない」「忝ない」という気持ちなんだと言ったのがマレットというイギリスの宗教学者で、そのことを『宗教入門』という本で書いたのです。

◆文化装置としての先祖供養

現代社会の特徴として、なぜ殺したとか盗み、詐欺といったものが多くなったのか。現代人は、ほとんどが戦後生まれになってきていますけれども、社会が裕福になれば悪徳行為は減少すると大人たちが考えたのは、今から六十年ほど前です。

日本が戦争に負けて、素っ裸になった時に、やはり殺し、盗み、詐欺が流行った。政治家たちは、生活が困っているから人を殺したりする。だから困らないような高度経済成長社会を作ろう。それは見事に成功しました。オリンピックも開催し、万博も行なった。ところが、もう今

は、食べるのに困っている人もいますが、六十年前と比べたら、ずいぶん社会は富んでいる。にもかかわらず悪徳は無くならない。これはどういうわけであるのか。

これには、もっと、もっと、という気持ち、取っても取っても足りないという私どもの心の奥



底に潜む心の働きがある。これを仏教では煩惱だとか我欲という言葉を使います。「我」というものの欲です。

これをお見通しになっているのがお釈迦さまです。

お釈迦さまはどう言われたかというと、人間の欲望は無限にして尽きることはない。このことをよく理解して、お互いに生きましよう。欲望を無限に解放したらどういうことになるか。

取っても取っても足りないといつて競争し、地球全体を食い尽くしてしまう、ということですよ。

これが人間と動物との違いで、動物も蟻などは蓄えますが、しかし不必要に蓄えて、それを投資して儲けるなんてことを動物はしない。

そこで、今の社会がおかしくなった原因として、伝統的な文化装置が機能しなくなったことを指摘したいと思います。お墓や仏壇、神棚は、「畏れ」や「あの世」を教える伝統的な文化装

置として長く日本社会に機能してきました。

「畏れ」の感覚を子どもや孫たちに教え込んだのは、お祖父ちゃんやお祖母ちゃんです。お祖母ちゃんと一緒にお寺へ行って、何があるのかよく分からないけれども、お線香の匂いのするところで拝んだという思い出が、後になってその人の科学知識では備わらないようなものを育てていく。ここが宗教儀礼の大事なところですよ。

お祖父ちゃん、お祖母ちゃんが「悪いことしたんでしよう。仏さまやご先祖さまがちゃんと見ているのよ」と言ってくれる。そのことが目に見えない文化装置として子どもの心を育ててきた。それが今外れかかっているということと、さまざまな社会問題とは深く関わっていると考えます。

「生と死」とか「あの世とこの世」「彼岸と此岸」という観念が弱まってきた。あの世なんて

のは無いよということになってきた。あの世があるか無いかについては、今でも議論がありませんが、どの宗教でも、あの世を否定している宗教は人類にはない。説き方は違えけれども、キリスト教も仏教もイスラム教も例外ではありません。

生まれた者は成長し、大人になり、年を取って、病になって死んでいく。二十代の人も、あと五十年経ったら同じように年老いていく。いくら鍛えても法則通り年を取る。だんだん弱くなれば病気になるやすい。やがて逝く。さあ逝った時、猿の世界ではそれつきりになります。人間だけが、人間なるがゆえに、あの世に行っても、安定して、こちらを向いて、私どもを助けてください、守ってくださいという関係が続いていく。それがさっきの東北の、「ご先祖さん、仏さん、取っておいてください」という言葉になっている。

スイスのカール・ユンク、日本語ではユンケ。二十世紀最大の心理学者で、人の心はどういうふうに出てくるかということでは、フロイトという人がいましたが、ユンクは人間の心の研究で飛躍的な業績を残した人です。ノイローゼになった人を現場で治す臨床精神医学の大家で、文化庁長官をなさった河合隼雄先生はユンクのお弟子さんでした。臨床心理士の資格を日本です。

ちょうど文化庁長官の頃、縁があつて対談したことがあります。そのとき先生は、お坊さんはよくお説教すると一方的にしゃべってしまう。しかし、若者や困っている人が尋ねてきたら、こちらがしゃべるのは出来るだけ抑えて、相手の言うことを、どんな話でもいいから、一時間でも二時間でも三時間でも聞いてやる。これが心の病を治す大原則だということをおっしゃいました。



ところが、僧侶という立場になると、お説教でしゃべり過ぎる。あれでは萎縮してしまうというのを聞いて、なるほどなと思いました。聞くことによって、人は心の中にあるものを吐き出してしまふ。悪いものを食べると嘔吐するのと同じように、どんどんしゃべる。そういうことが大事だと話されたことを今でも記憶しています。

科学者であり心理学者のユンクは、霊について「死者の霊というのは、人類が始まって以来の普遍的な心的事実である」と言っている。霊があると思うのは、人類が出来た時からの、普遍的な、どこにでも区別なくある心の事実である。だから、あるかないかの証拠を必要としないというのです。

よく霊はあるかないか、どこであると決めるか、なんて今でも議論しています。しかしユンクは、そんな証拠立てをする必要はない。なぜ

なら、人類は全部それを心の中に入れてきている。ただ、入れてきているものが開発されるか、眠ったままで終わるかの差であると言っている。

読みたい人は『生と死の謎』という本です。

サイマル出版から一九八九年に出た本です。普通の人が言うところ、そんなのは迷信だと言われませんが、ユンク大先生がそういうことを言っているとなると大変な力になる。霊に対する意識というのは人類普遍の心的事実だから証拠を必要としない。あるかないかを実験するなんていう以前の問題だと言っているわけです。

◆さまざま「供養」の形

「供養」はインドの言葉で「プージャー」と言います。「プージャー」を訳して「供養」としました。その意味は、尊敬を以て、あるいは尊敬の心を以て懇ろに、心の奥底からもてなす

こと。だからお友達や恋人をもてなすのも供養です。ご供養してあげるんです。

「供えて養う」と書きます。これはいい訳です。具体的には、仏教では仏法僧の三宝。仏さまと、仏さまのお説きになったお経、そして仏さまの教えを守って伝えてきたお坊さん。それを三つの宝と仏教では言いますから、そういう三宝にご供養する。それから父母、自分がお世話になっている会社の社長さんや先輩、亡き人、亡者などに香華、お灯明、食べ物などを供えて捧げること。これが「プージャー」、供養であると言うのです。

曹洞宗ではあまりこういう言葉使いませんが、真言宗では供養は非常に大事で、六種供養というのを行ないます。その六つは「闍伽（あか）・塗香（ずこう）・華鬘（けまん）・焼香（しようこう）・飯食（ぼんじき）・灯明（とうみょう）」です。

「開伽」というのは水を供えること。「塗香」は香を供えると同時に、拜む人がいい香を自分の手や身体に塗る。「華鬘」は、お花を供える。「焼香」は線香を焚く。「飯食」はご馳走を供える。「灯明」はロウソクを立てる。

また大乘仏教では「六波羅蜜」という実践項目があります。インド語でパーラミター。誰が実践するのか。菩薩です。お釈迦さまのようになりたいと、お悟りを求めて修行している人が毎日実践しているものが六種類ある。それが六波羅蜜です。パーラミターには、お釈迦さまの世界に到るという意味もある。「到彼岸」と言います。彼岸は仏さまが住んでいる所。そこへ到るという意味もあるということです。

さて、それはどういうことか。まず「布施」をする。布施というのは、物でも心でも、困っている人に与えることです。この頃、布施というとか包んでお寺さんに上げるものだけが布

施になりましたが、広く施すということですので、物でも心でもお金でもいい、困っている人に捧げましょう。次に「持戒」というのは、殺してはならない、盗んではならない、嘘をつくなどという定めを守ること。「忍辱」は堪え忍ぶ。人生には堪え忍ぶことがたくさんあって、みんなそれを放り投げたら終わりです。「精進」というのは努力を続ける。「禪定」は坐禅をして心を整え、身を整えていく。「智慧」というのは仏教の教理を学ぶことです。

一般の人々の間では、死者やご先祖を懇ろにもてなすことを供養と呼びます。その根っこには、死者やご先祖の守護力への期待がある。死者やご先祖は供養されると有り難く思っ、私どもを守ってくださいるんだということです。

子どもが親に孝行する。親は子どもをかわいがる。それと同じような相手と自分との密な関係が供養というものにはある。そして日本人は、



長く供養というものに対する感性を持つ民族でした。

ちよつと挙げただけでも、器物供養というものがある。古くなつたものを捨てないという気持。今はゴミをどんどん捨てるという時代ですが、勿体ないという気持になると、これをお寺

や神社に納めて、拝みながら葬つてあげる。これが器物供養です。

それから、動物供養。今はペットを買つてきて、かわいがつても、言うことをきかないと捨てちゃうという。捨てられたペットをお役所で全部殺処分している。テレビで見たら、何と、殺処分して火葬にした犬や猫の骨をアスファルトを作る材料に使つているというのでビックリしました。われわれが踏みつけているアスファルトが、かつてのペットかも知れないということです。

古来、日本人は動物の供養をしてきました。

それから針供養というのは、一針一針縫つて行く針が短くなる。昔はこれを豆腐に挿して供養した。人形供養は今でも古いお雛さまなどを供養する。仏壇が古くなつたからといって捨てては駄目だ。仏壇には仏さまの命が宿つているのだから、お寺に納めます。下関では河豚供養

をしています。ウナギを採っている静岡県浜松のあたりでは鰻塚というものを作って感謝する。

白蟻塚まである。シロアリというのは悪いもので、新築の家の土台を食っていく。だからフマキラーか何かで一網打尽にするけれども、やっぱりそれを拜んであげるというのが日本人らしいところですよ。殺したんだから申し訳ないという気持がある。

それから生きた魚をどんどん刺身にして食べています。それを供養する。ハチミツを採取しているところでは蜂塚というものを作る。鯨を捕る所では鯨の霊簿まである。鯨に名前を付けて、何と何と何を殺したからと言って、過去帳と同じ物を作る。鯨の供養簿が山口県にはあるという話です。

つまり、人間のために使用され、命を奪われたものは人間と同じように物を捧げて、「悪か

ったね。おかげで自分たちは生きていますよ」という感謝の言葉を述べた。

◆ 功德は宗教的な力となる

では、曹洞宗では「供養」というものをどう説いているのかに触れておきたい。

道元禅師の著作の中に「供養諸仏」というのがあります。諸々の仏を供養することが大きな供養になるということを『正法眼蔵』に書き残しておられます。これを現代語に訳して説明すると、こういうことになります。

「諸仏に供養する功德によって仏となるのである」。人々がお釈迦さまのような人になるには、いろいろな仏を供養する。そのお徳によって仏になるのである。「未だかつて、お一人の仏をも供養したことのない者が、どうして仏となることができようか。因なくして仏となることはあり得ないのである」。供養するという

原因を作れば仏に成るといふ結果が伴う。仏に成ろうとすれば功德を積みなさい。その功德は供養である。供養したことによつて功德が積まれる、ということです。

次に「十種供養」といつて十種の供養をお説きになつてゐる。その第五に「自作供養」があります。自分で供養を作（なす）すということです。六つ目には「他人をして仏及び靈廟に供養せしめるのである」と言つてゐる。「他作供養」といふのは、他人に、あんたも供養しなさいよと勧める供養です。

自作供養は大功德を得ることになりますよ。他人をして供養させると「代々功德を得る」と道元禪師は述べています。そして、自作供養と他作供養を両方をする、最大の功德を得るのであると記してゐる。

功德の「徳」は何であるか。これはなかなか難しい。私は、お徳というのは力だと思つてい

ます。ある種の宗教的な力がそこに生まれる。お功德というのは自分を守つてくれる。宗教の根っこは力です。それは科学的な証明を超えた力です。法と言つてもいい。お坊さまのお袈裟は仏さまの力の象徴です。

「勿体ない」とか「畏れ多い」という感覚を若い人や子どもたちに育ててほしい。教育界は制度や組織や人間関係の合理性を問題にします。学級が多いと、四十人より三十人にして、ここで何を教えるかが問題です。心に関することは文科省で徳育ということを言つていますが、徳育の中身が曖昧です。何を教えようとしてゐるのかよく分からない。

その中に「いのち」のことも書いてありますが、文科省でやつてゐるのは、憲法の関係もあつて、いのちなるものの深いところへの眼差しを欠いてゐる。だからこそ宗教や仏教が出番として出てこなくてはいけない。

要するに、徳育の中身はどうかと言うと、見える世界は見えない世界に支えられているという認識や感性が必要である。世の中これだけではない。向こうへ行った人々が、実はいつでも眼差しをこちらに注いでくださっている。向こう側からの眼差しを忘れると、人の見ていないところでは何をしてもいいという行動が増えます。

他人が見ていなくても、盗んではいけないのは、ご先祖が見ているよ、仏さまが見ているよ、ということを中心の中の価値観に刷り込んだから悪いことができない。今ではみんな刑法に触れることは恐れるけれど、見えない世界を認めにくくなった。それを説くのが宗教であり仏教です。

金子みすずの「大漁」という有名な詩を引きます。

朝焼け小焼けだ大漁だ
オオバいわしの大漁だ
浜は祭りのようだけど
海の中では何万の
いわしの甲いするだろう

有名な詩です。金子さんは海辺で生まれ育った人です。自ら命を断って、若くしてこの世を去りました。

今日は朝焼けでお天気がいい。海に行った人々が戻ってきたら、鯛がたくさん捕れて大漁だ。浜の人は喜んで祭りをしようだけれども、見えない海の中では何万匹の鯛の甲いをするだろう。

今私は、見える世界と見えない世界と言いましたが、見えるところでは大漁だ、有り難いとお祭りをする。ところが見えない海の底では、鯛たちがお互いに甲いをするだろう。鯛は甲い

をするわけではないけれども、金子みすずは、鰯の哀れさを謳っている。

われわれは鰯の塩焼きを美味しいといって食べているが、しかし鰯を自分に重ねたら、自分が食われるということはどうだろう。一匹二匹ではない。何十万匹もの大漁だと人間は喜んでるけれども、見えない海の底では供養をしているのではなからうかという。詩人らしい、宗教的な感性を持った詩だと私は思います。

どうか、こういう「畏れ」の感覚を子どもさんたちと分け合って頂きたい。ここにお集まりの方は、そういう「畏れ」に目を開く可能性を多く持っています。あるいはすでに開いていらっしゃる方が多いだろう、ということを申し上げて、私の拙い話を終わります。ありがとうございました。



〈連載〉

『普勸坐禅儀』に学ぶ その五

駒沢女子大学教授 安藤嘉則

〈本文 書き下し文〉

夫れ参禅は静室宜しく、飲食節あり。

〈現代語訳〉

まず坐禅をする場合、静かな部屋が適切です。

飲食はほどよく摂ることが大切です。

この一節から坐禅の具体的な方法が述べられます。まず坐禅するための前提として場所や食事などの環境条件を整えることが必要です。坐

禅する場所ですが、騒がしいところよりは静かなところが適切です。特に初心者などは坐っていると、いろいろな音や声にとらわれてしまい、集中できなくなるからです。

ところで現代の私たちの周りには、あまりにも様々な音が氾濫してはいないでしょうか。都会では静かな空間がますます少なくなり、逆に音がないと落ち着かないという人もいるようです。よく電車の中で耳にイヤホンを当てて音楽

を聴いている人を見かけます。中には音漏れさせている人もいれば、読書しながら聴いている人もいます。もちろん音楽を楽しむことはよいことなのですが、アルコール中毒ならぬ、音楽中毒もしくは音中毒であれば、かえって本当の音楽のすばらしさが失われてしまうような気がいたします。

ところで私たちの日本の文化は「間の文化」であるといわれることがあります。たとえば能楽で鼓などの打楽器では、ポンというあの鼓の音と音との間に沈黙の間があります。しかしその間の無音の状態は意味がないのではありません。あの静まりかえった中で、ぎりぎりの緊張感が高まったその瞬間に次の一打が入ります。そのときの驚くほど効果的な音の響きは静まりかえった状態だからこそ生まれます。その静寂は次の一打を強烈な一打に高め、印象づけるためであるといえるでしょう。また水墨画や禅画

を見ても、西洋の油絵のように一面に絵の具で塗りつぶされているわけではありません。かえって白紙の間があることで精神的深さを表現することもあります。しかし、この間がびたりとはまってとれていないと「間が抜け」てしまい、「間抜け」といわれることになります。

さて坐禅堂など静かな空間に坐っていますと、ふだん聞こえないものが聞こえてきます。よく線香の灰が崩れる音が聞こえたといった話を聞くこともあります。それほどまでではなくとも、自分自身の息づかいの音、遙か遠くで話している人の声、鳥のさえずり、さまざま音が聞こえたりします。普段それらの音はいつも響いているはずなのですが、沈黙の中ではじめて聞こえる音であるといえましょう。むしろんそうしたささいな音にもとらわれず、右の耳から左の耳に受け流し、心に跡をとどめないようにするので、いずれにしても静かな部屋で

の坐禅は普段よりとぎすまされた感覚を覚えるのではないだろうか？ このとぎすまされた感覚は坐禅の修行のベースになっていると思います。

次に食事のことについて道元禅師は「飲食節あり」と述べています。節度ある食事をとることであり、これはいうまでもないことです。食べ過ぎて満腹状態で坐りますと、眠たくなりまじ、空腹状態でやってもなかなか集中できません。よく禅の修行というと粗末な食事で激しい作務（労働）をするというイメージがあり、実際修行道場において経験することなのですが、しかし道元禅師は劣悪な条件で食べるものを食わずに修行に励めといっているではありません。坐禅は単なる苦行ではありません。考えてみますと、禅宗が日本の飲食の文化に与えた影響は意外にも大きいのです。たとえば中国から味噌と醤油を伝えたといわれるのは法

燈国師心地覚心という禅僧ですし、茶祖として中国から抹茶を伝え、『喫茶養生記』を書いて将軍源実朝に勧めたのが栄西禅師です。また江戸時代に煎茶の流儀を広めたのは黄檗宗の僧であり、その宗祖隠元禅師はインゲン豆や西瓜そして普茶料理など、中国の新しい食文化を伝えていきます。

また道元禅師は『典座教訓』と『赴粥飯法』という食に関する名著を書いています。前者は修行僧のために心をこめて食事をつくることも大切な修行であることを説き、後者はその食をいただく意味を見つめ直し、感謝の心で食を受ける作法を示しています。

〈本文 書き下し文〉

諸縁を放捨し、万事を休息して、善悪を思わず、是非を管すること莫れ。

〈現代語訳〉

もろもろの関係を捨てて、あらゆることを一旦やめてしまい、自分にとって善いとか悪いとかを思わず、また正しいとか正しくないとか判断することをしてはならない。

「諸縁を放捨し」とありますが、「諸縁」とは自分を取りまくさまざまな関係、いわゆる「ご縁」を意味します。坐禅をする場合、何はともあれ、それまでのしがらみ、気にかかることを一旦ご破算にします。「万事を休息して」というのも同じ意味で、あらゆる営みを止めてみることです。もちろん、どうしても心にひっかかることも大抵あることでしょう。しかし、それはそれとして放っておいて、まずは現在の自分に向きあうしかないのです。

そもそも「ご縁」というのは必ず相手があることです。そして相手との関係性は常に相対的

で互いの距離感も微妙でしょうし、相手の肩書き・年齢・性別・身分によっても細かな対応が必要ですが、状況によっては、白いものを黒といわれても、うなずかなければならないこともあるはずですが。「渡世人のツレーところよ」とは寅さんの言ですが、寅さんでなくとも、社会で生きていく私たちは自分だけというわけにはいきません。いつも相対的な人間関係にふりまわされているうちに誰しも疲れ、次第に自己を見失ってしまう人が出てくるのも無理ありません。

坐禅というのは自己を見つめることです。そのためにはこれまでのことをチャラにして白紙の状態で自己に向きあうことが坐禅の出発点です。「仏道をならうことは自己をならうなり」と道元禅師はおっしゃいました。仏道は私自身と離れたところにあるものではありません。仏教を知識や教養として学ぶのももちろん悪くはな

いのですが、自己の支えとなるのが仏道であり坐禅なのです。

次の「善悪を思わず、是非を管すること莫れ」という言葉は、少しとまどうのではないでしょう。善と悪を判断しなければ、倫理や道徳が崩れてしまうのではないかという声が聞こえてきそうな言葉です。実際仏教以外の宗教の方で、この点をとりあげて仏教には倫理がないのだと批判する方もいます。確かにこの言葉だけで仏教をとらえようとするならば倫理を否定するようには思えるのも無理ありません。しかし釈尊は「七仏教通誠偈」で

諸悪莫作（もろもろの悪をなすなかれ）

衆善奉行（もろもろの善を実践せよ）

自淨其意（自らの心を清淨にせよ）

是諸仏教（これが諸仏の教えである）

と述べています。これが仏教の原点にあることを忘れてはなりません。倫理としての善悪の

問題はこの偈に明確に示されています。

ところで、この『普勸坐禅儀』で述べられているのは、私たちが相対的な視点から、「これは善である」「悪である」「これは正しい」「間違っている」と言っているのですが、本当にそうなのだろうかということを私たちに問いかけているといってもよいでしょう。

たとえば現在民族や宗教によって各地で衝突もしくは戦いが繰り返られています。ある民族のAさんが国のために銃をとって戦い、戦功をあげることが、英雄的で正しい行いとして評価されますが、対立する民族のBさんにとっては自分の大切な家族を失わせた加害者であり、それが正しい行為であるとはけっして認められません。

あの広島・長崎の原爆投下でさえ日米の評価はまったく異なっています。日本で原爆投下を評価する人はほとんどいませんが、アメリカで

は間違っていないなかったとする人が過半数を超えています。これは、スミソニアン宇宙航空博物館において、原爆投下したエノラ・ゲイというB29爆撃機を展示する際、広島の被爆の様子を伝える展示をしようとしたとき大問題となり、全米でアメリカの人々の意識調査をしてわかったことです。あの原爆投下ですら国によって考え方が異なっているのです。

正しいものがないといっているのではありません。あくまで七仏通誠偈の精神が仏教の基本なのですが、同時に私たちが絶対正しいと思いきこんでいる価値判断に対してまずニュートラルになることを求めているのです。

この後、引き続き道元禅師は坐禅の組み方、手の組み方、姿勢の取り方について説明していきますが、次号において解説したいと思います。

(続)



降三世怨五回



三喜庵

長年、院代として善光寺を支えて頂いた桐元大智老師に代わり今年より前平武男師が院代となりました。博志方丈の晋山式に向け新体制で挑む事となりました心境を『し縁』をテーマにお話いただきました。

牛に引かれて善光寺参り

善光寺院代 前平武男

皆さんご存知の通りここは横浜の善光寺です。同じ名前で有名な信州信濃の善光寺。そこには有名な「牛に引かれて善光寺まいり」という話がありますね。

その昔、信仰心の薄い、強欲なおばあさんが

いました。ある日、このおばあさんが洗濯物を干していますと、牛がやってきてその洗濯物の布を角に引っ掛けて持って行ってしまおう。おばあさんは「まで、まで！」と追っかけますが、牛は待ってられない。あきらめようとする



と牛も止まる。おばあさんは腹をたてて牛と追いかけて。やがて追いついた所が善光寺。そしてふと気がつくときまさに沈もうとする夕日に照らし映されたご本尊様、阿弥陀如来様。おばあさんはそのあまりの神々しさに、それまでの強欲さを反省し、一心に仏を拝む、信心、信仰心があふれてきた。と言うお話です。

皆さんはどなたに引かれて横浜の善光寺へのおまいりでしょうか？

私の場合、「素子に引かれて善光寺まいり」といったところかなと思います。(笑)

素子って誰かと言いますと実は私のかみさんで、先代方丈の長女です。つまり、先代方丈の長女と結婚したわけです。

私事で失礼します。十年越しの付き合いの末によく結婚となったわけですが、その出会

いは変わってしまして、お寺の娘なんです、が、キリスト教の大学で出会いました。私は高校からキリスト教の学校。聖書の授業もあり、賛美歌も歌いました。今思うとお経よりも賛美歌を先に覚えたんですね。

勉強よりもアルバイトばかりの学生時代を過ごしていました。

その中でも結婚披露宴のサービスをよくしていました。バブル時代で派手な式がまだ多かった時代です。結婚式でつきものと言えばスピーチ。

なかでも印象に残っているのが「三つの坂」というお話。ご存知の方もおおいと思います。

今日めでたくご結婚されたお二人に送ります。人生には三つの坂があります。

上り坂もあれば下り坂もあります。良いときで

もそうでない時でもお互いに助け合って仲良くして下さい。(健やかなるときも病めるときも 汝はこの人を助け敬い愛しますか?)

そして、人生にはもうひとつの坂、まさかの坂があります。突然に思いがけない事が起きた時、そんな時こそお互いに力を合わせて乗り切ってください。というお話。

実は私自身このまさかの坂を経験しました。学生時代の頃です。

朝起きていつものように「おはようございます」学校に行くのに「いつてきます」と言葉を交わした父が、倒れてその日のうちに帰らぬ人となってしまったのです。脳出血の一種でした。倒れたその日です。

何の前触れもなくそれまで元気でいつまでもいるものと思っていた父の死です。

一体何が起きたのか全くわからない。現実とは思えない出来事。ショックですよ。一家の大黒柱。全く予期しない、準備もないときに突然やって来たまさかの坂。私の家族は祖母と両親、そして兄が二人の六人家族でした。こういっては何ですが、順番から言ってもいずれば祖母が亡くなるのかなあと漠然と思っていたわけです。また、身近な人が死ぬと言うことが理解できなかったんですね。私の人生が大きく動いた出来事でした。

その後、いろいろと精神的にも苦しい時期もありました。命のはかなさに、もろさにややもすると投げやりになった時期もありました。

そんな悩みの中で宗教に頼った時期もありましたが、ピンと来るものはなかった。その間、今のかみさん、素子の存在にだいぶ助けられた気がします。

付き合っていましたので、何度かこのお寺にも遊びに来るうちに先代の方丈ともお話をする機会がありました。

「おばあちゃん元気かい、お母さん元気かい。大丈夫？ 生活は何とかなる？」優しい言葉。

そのうちにあの大きな声、押し強い、力強い声で、「どうだ！」と声をかけられまして、「これから新しく、やすらぎの郷という霊園をやる。寺でお墓を持つことは善光寺三十年の悲願だ。そこで俺の秘書課長でもやれ」と言われました。皆さんもご存知の通り親分肌の人でしたから、ついついその気になりましたら、いつの間にか髪の毛をそって坊さんになっていました。……まさかですね。(笑)

結婚式を挙げて、二カ月後に永平寺に。雪降る永平寺の山門で、初めて冷静になり、これは大変な事になった。でもここで帰るわけにもい

きません。腹をくくって修行するわけです。坊さんになるからにはどんな坊さんになるか。そもそも坊さんってなんだろう。考えました。

先代にはとにかく、「尽くして、尽くして、尽くしぬけ」と言われていました。

こんな言葉があります。

『僧、仏に向かうとき、仏、僧を見ず。僧、衆生に向かうとき、仏、僧を見る』

私自身、「人の痛みに寄り添える坊さんになる」と考えましたが、口で言うことは簡単ですが、いまだその入口をうろうろしているだけのようになっています。

そんな中現在、東京の仏教情報センターにて仏教テレフォン相談の相談員を務めさせていただいています。

仏事の相談であったり、人生相談であったり、寂しさからでしょうか、毎日のようにかけてこられる方、話をしているうちに泣き出す方、その内容は本当に色々です。人はいろいろな事で悩むんだなあ。誰かに聞いてもらうだけで悩んで出られなくなった袋小路からぬけだす手がかりを見出すこともあるんだなあと思います。悩んでいる時はその悩み事で頭がいっぱいになっていて新しい考え方が出来なくなっている。でもその固くなった頭を柔らかく解きほぐすことが出来たら自然と悩みは消えている。悩みとして感じなくなっている。同じことでも考え方一つ、こころひとつだなあと。そんなことを感じ始めたところですが、まだまだ話を聞かせてもらうだけで、大してアドバイスらしい事は出来ません。まだまだ修行中です。

永平寺から戻ってからの事。



先に永平寺で三年間修行し、タイ国にも修行に行った現住職、博志方丈も帰っていきまして、私にとつては、義理の弟でもあり、お寺では兄弟子になるのですね。博志方丈と二人、よく先代方丈に叱られました。

夕飯は寺の台所で頂くのですが、二人並んで方丈の前に座るんです。

食事中に、急に叱られる事もよくありました。「いいか、博志。わかったか。だめだぞ前平。そんなことでは」「ばっかだなあ」「貴様！」本当によく叱られたと思います。師匠と弟子の関係です。息子も婿も区別なく叱られました。でも毎日、叱られる事ばかりしていたわけではありませんで、実は、自分のことではないのに怒られることが多くありました。最初はなんだかわからなかったのですが、そのうちこれは、言葉ではないんだなあと思うようになりました。

おっしゃられる言葉そのものではなく、言葉

の裏側、真意、文章の行間みたいなものを読み取りたい。そう思うようになりました。当時の自分なりには努力をしたつもりだったのですが、おそらく、百分の一も受け止めることができなかつたと思います。先代は、言葉ではない、いろいろなことを伝えたかつたのだらうと思います。

そのような先代方丈は師匠であり、義理の父であります。おいそれと親しく近づきたいものがありました。

あるとき、たまたま台所で二人になることがあり、その時に先代方丈にあの時に声をかけていただいたお礼を兼ねて、『あの時期でなければ、たぶん坊さんにはなつていなかったと思います。タイミングがちょうどよかつたのですね』というような、話をしたんです。

そうしたら先代方丈さんは「それが、縁だな。

仏縁っていうんだな」と教えて下さいました。

そんな先代方丈も皆さんご存知の通り、今から五年前、平成十六年十二月二十九日にご遷化なされました。遷化とはお坊さんが亡くなつた時に使う言葉で、布教、教化する場所を遷されたという意味です。

元気でエネルギーの塊のような方で圧倒的な存在感の方が病気になる、やせていかれる。まさかでした。私にとつてまた理解できない、受け入れられない出来事です。余命いくばくもない、と聞かされた時。まさか……。

いよいよ容態が思わしくないといわれ十二月の二十三日、家族が病院に呼び出されます。今晚が峠かもしれないと。

酸素マスクをつけた状態で何時間、先代のベッドの周りにいたでしょうか。夜十時を過ぎた

ころまだ三歳になったばかりの私達の子供が眠くてぐずりだしました。

先代方丈にとつては初孫で、とてもかわいがっていただきました。その子を車に乗せて寝かせようと病院の周りを何度も回りました。

歳末、消防団の待機所の赤いランプが何箇所も灯り、小型の消防車が通り過ぎます。いつもなら眠るはずの子供も異常を感じてなかなか寝付きません。そのうち携帯電話が鳴ってとりあえず病室にこいとので駆けつけます。

病室では、家族一人ひとりが師匠にお別れの言葉をかけているとのこと。

あなたも一言といわれベッドの脇にいきました。あなたが言葉が出てきません。

やっと一言「方丈さん」と言おうとした時に、師匠はその大きな手で私の手を握りもうひとつの手で、ベッドの脇にいた博志住職の手をとり、自分のお腹の上で握らせました。

「いいか。仲良くやれよ。博志を頼んだぞ。力を合わせて仲良くやってくれよ。けんかすんなよ、頼んだぞ」と言われた気がしました。言葉ではなく、その心に触れることができたと思います。

最後の最後まで師匠は私にその事を伝えたかったのだと思います。

それから五日後に師匠は遷化なされました。私を僧侶の道へ導いてくださった師匠の死、そして最後に託された言葉は私の胸に今も生きています。

おそらく先代方丈は出会った多くの人たちに言葉だけでなく、心から接してこられたのだと思います。だからこそ亡くなってからも多くの方がそのご縁を大切にしてください。善光寺を支えて下さっているのだと思います。そして、

博志方丈もその方々に感謝の念をもって受け止めていたからこそ、先代方丈亡き後も善光寺はこうして、皆様にお参りいただけのお寺であり続けているのだと思います。皆様それぞれ、さまざまにご縁で善光寺参りにお越しいただけるのだと思います。

実父と義理の父。この二人の死と言うものが今の私を形作っています。

頂いた、ご縁、教えそしてご恩に報いる為に何とか未熟ながらやっている。いや仏様からさせて頂いているような気がします。

ご縁、ご恩と申しました。

かけた恩は水に流し、

受けた恩は石に刻め

恩という字は、因に心と書きます。因とは因縁。縁起のこと。

細かく言いますと、因と縁と果に分けられま

す。原因があつて、結果がある。その間に縁が存在する。

たとえば、花の種があつて花が咲く。でも種をそのまま置いていただけでは花は咲きません。その種を土に埋めて、水をやりお日様にあてる。それらの縁つまり条件がなければ結果は出ない。違った結果になる。間にある縁の存在。この縁の、受け止めようによって結果が違ってくる。

受け止めるのは他でもない自分自身。自分のところ。このところ一つで人生が変わってくる。いや人生は変えることが出来る。

心が変われば行動が変わる

行動が変われば習慣が変わる

習慣が変われば人格が変わる

人格が変われば運命が変わる

松井秀喜選手が恩師山下監督の言葉として紹介しています。

偶然の縁などではなくて、すべて意味がある必然の縁である。その頂いた縁に対し、縁から逃げずにしっかりと受け止める。

先代方丈さまはよく『人生に無駄なことは何もない。良い悪いは無いんだ。おかれている場所ですっかりと務めていけば、何も恐れることはない。無駄なことは何もないんだ』と教えて示して下さいました。

しつかりと縁を受け止める。受け止めるのは他でもない自分自身。自分の心です。でもこの心こそが一番頼りないのです。すぐ乱れる。

お釈迦様は、「心の畏るべきこと毒蛇、悪獸、怨賊よりも甚だし」と説かれ、「勤めて精進して汝が心を折伏すべし」こころを整えるべし、と説かれます。

なぜこんなにも自分の心が一番頼りないの

か、誰でもそうですが、自分の心の底深くに自分を中心に見る心が存在する。

それは煩惱、欲望。代表的なものを貪・瞋・痴（とん・じん・ち）の三毒と呼びます。

むさぼる心、おこる心、おろかな心……先代方丈さまはよくおっしゃっていました。

『私たち怒りますね。自分が悪いのに怒っている。どうして怒るのか、愚かだからですね。どうして愚かになのか、それが、むさぼる心と申しまして、人様と比べて自分のほうがよくない。よく思われないなどと思う心があるから。この三毒があるからいろいろ至らない事が起きてくる』と。

この三毒。言葉を変えれば鬼なのかも知れません。心の中に住む鬼。この鬼は身勝手に、いつでも暴れる。暴れる機会を待っている。だからその都度その都度この鬼を退治する。人間で

ある以上鬼を完全に退治することはできない。ならば、心掛けて鬼を飼いならす。そして自分の意志で鬼の好きなようにさせない。そのことが必要であると思います。

よい縁にめぐり、喜びにあっても、その楽しみ喜びをむさぼらない。また悪い縁にめぐり、悲しみにあっても、その悲しみ、苦しみに焦げ付かない。

心の中には、煩惱の鬼だけでなく、福の神となる、心もあると思います。

「笑うかどには福来る」
どうぞ、笑顔でよい縁を結んでいただければと思います。

「牛に引かれて善光寺参り」のお話には続きがあります。お寺に飛び込み、阿弥陀如来様を

拝むおばあさんが、ふとお堂の床に目を移すとそこには牛のたらしたよだれが鮮やかに光輝く文字となっておばあさんにこう語りかけたと言われます。

牛とのみ 思いはなちぞ この道に

なれを導く おのが心を

(牛だけではない。おまえのこころがおまえを仏の道に導いているのだぞ)

「鬼は外、福は内」

節分にあたり、身の回りのご縁をしっかりと受け止めて今年一年の皆様のご多幸を祈念いたします。



開山 榎庵白純大和尚
三十三回忌法要
第二十四回
育英会辞令交付式



開山棟庵白純大和尚の三十三回忌法要並びに「横浜善光寺留学僧育英会」の第二十四回辞令交付式が平成二十三年二月十一日午後二時から執り行われました。釈迦殿には関係のご寺院様、檀信徒総代、親類縁者をはじめゆかりの方々が集い、ご開山のご遺徳を偲ぶと共に、先代の大圓武志大和尚が心血を注いだ育英事業の継続発展を喜びました。

育英会の平成二十三年度採用者は、ポーランドのアダム・ミソキュビナ大学大学院日本学科修士課程のウカシユ法純シュブナル氏（二十九歳、男性）、ドイツのハイデルベルグ大学日本学部のエッカーター・トビアス氏（二十六歳、男性）、中国の中国人民大学哲学科博士課程の史経鵬氏（二十六歳、男性）、日本の樋口星覚氏（二十九歳、男性）の四人に決まり、理事長の黒田博志住職から辞令と育英金、記念品が授与されました。



開山棟庵白純大和尚の三十三回忌は、本寺光真寺のご住職、黒田俊雄老師の導師により厳修されました。引き続き育英生の辞令交付式が行われ、安藤嘉則理事が「優秀な方が応募され、選考は例年になく困難だったが理事長の英断で四人を採用した」と選定経過を報告されました。

育英生は、ウカシユ法純シユブナル氏が駒沢大学博士課程へ。エッカーター・トビアス氏は京都の黄檗山萬福寺で修行。史経鵬氏は武蔵野大学の交流協定留学生として留学。樋口星覚氏は米国のニューヨーク禅センターで修行されます。

式典終了後、黒田俊雄老師は「先代の大圓武志大和尚が心血を注いだ育英事業の志を博志住職が引き継ぎ、今年は四人もの育英生に辞令を交付することは仏道興隆のために尊いこととお祝いし、感謝を申し上げます。泉下で武志大和尚も喜んでいると思う」とご挨拶されました。



博志住職は「昨年十一月に先代の七回忌と私の晋山式を無事勤めることができた」と感謝の言葉を述べ、「開山様が亡くなったのは私が三歳の時で、葬儀の時、中耳炎で大泣きしたことしか覚えていない。大雪だったと先代に聞いている。先代が亡くなった時も雪が降った。今日も大雪に見舞われ、何か不思議なご縁を感じる」と感慨深く振り返りました。

また、育英会について「初代理事長である先代の心を心として日々精進していきたい」と決意を新たにすると同時に、「先代に何回も言われたことは、人のために尽くせということだ。尽くして尽くして尽くし抜け、と言われたことが少しわかってきたような気がする」と述べ、師であり父である先代・武志大和尚の遺訓を胸に刻んで歩んでゆく覚悟を力強く表明しました。

育英会辞令交付



(第23回 育英生)

<平成22年度 第23回 採用育英生 【全2名】>

名前 (よみがな)

国 籍/年 齢/派遣先

- 1 伊藤 康心 (いとう こうしん)
日本/36歳/タイ・ワットパクナム
- 2 トラン・クオック・フォン
ベトナム/28歳/日本

<平成23年度 第24回 採用育英生 【全4名】>

- 1 ウカシュ・法純・シュプナル
ポーランド/29歳/駒大博士課程修学
- 2 エッカーター・トビアス
ドイツ/26歳/京都萬福寺
- 3 史 経鵬 (シ ケイホウ)
中国/26歳/武蔵野大学
- 4 樋口 星覚 (ヒグチ セイガク)
日本/29歳/ニューヨーク禅センター



(第24回育英生)



【育英会ニュース】

藤田一照老師 テレビに出演

毎月第四日曜日、夕方三時からの坐禅会にてご指導を頂いていた藤田一照老師（第九期育英生）がNHKの「こころの時代」（平成二十二年七月七日放送）に登場。

在家の御出身で出家されたご縁。幼少期より感じていた不思議な感覚から坐禅との出会い。日本とアメリカで修行をされた経験などをお話されました。その中で善光寺での坐禅会の様子が具さに放映されました。

NHKの「こころの時代」の影響力は大きく藤田老師の独特の指導方法や善光寺との関係などが紹介されたことから、数多くの視聴者の

方々より問い合わせが寄せられました。

現在藤田老師はアメリカ・サンフランシスコの曹洞宗国際センター所長に就任され、アメリカで大活躍。

従って老師による坐禅会の指導はしばらく休止となります。

しかしながら坐禅会自体は、住職指導のもと変わらずに行っておりますので、どうぞご参加下さい。

胡 建明師 哲学博士号取得

平成二十二年七月九日に善光寺留学僧育英会の第十一回留学僧であった胡建明師が善光寺へ上山しました。胡師は中国人民大学博士課程に在籍していましたが、このたび中国華厳教学の大成者圭峰宗密の研究（「宗密思想の形成と発展」）で哲学博士の学位を取得されました。

胡師は天童寺にて修行されて来日。駒澤大学・東京大学に学んで仏教を学んだ後、東京芸術大学大学院、南京芸術学院大学院に在学され、すでに禅僧の墨跡の研究で文学博士を取得されています（『成寿』第三七号で紹介）。

胡師によると、善光寺育英会の留學僧として黒田武志老師に物心両面にわたって支えられたことに対する強い感謝の思いがあり、北京の中国人民大学での学位授与式には前回と同様、武志老師からいただいた赤いネクタイを着用して臨んだとのこと。そしてこのたびその学位記を持参して善光寺武志老師の御真前にて報告をされました。

善光寺育英会もさまざまな困難を超えて再開されましたが、こうして育英会の留學僧が国際的に活躍されていることは喜ばしいことです。ここにお知らせさせていただきます。

（善光寺育英会理事 安藤嘉則記）



トラン・クオック・フォン師

愛知学院大学大学院博士前期課程に在籍中の同師は平成二十三年二月、『大乘仏教における二諦思想の研究』と題した論文を提出、本育英会にも、そのコピーを持参し報告をされた。師は現課程継続後に博士課程に進む予定。今後益々の精進を期待致します。

タイ国の僧侶来山

去る六月五日、タイ国ワットパクナム寺院より来日されていた僧侶二名が来山されました。そしてタイ国の政治的不安定な状況から、訪タイが延期されていた育英生、伊藤康心師についての話などをされ、博志方丈も自らのタイでの修行を思い出すひと時を過ごしました。



七月には伊藤師の訪タイも叶い、ワットパクナム寺院で安居できました。

【育英生からのお便り】

◇現在、ワット・パクナム寺院にて修行中の第二十二回育英生の伊藤康心師からのお便りです。

【盛夏】

バンコクは、日本よりも暑くないようですが、蒸し暑い日々を過ごしております。

黒田様におかれましては、相変わらずお元気で活躍のことと存じます。

さて、この度はワット・パクナムでの修行につきまして、ひとからならぬご尽力を賜り、私事ですが、釈尊の教えを原始の形で聞いてみたという思いを成していただき、感謝の気持ちでいっぱいでございます。まずは、朝夕のお経の勉強ということで、日々精進していこうと思っております。

また以前、善光寺様よりワット・パクナム文

庫という図書が送られたようですが、図書室に散乱しており、ひどい汚れようであります。

こちらに日本人の平田潔さんという方がおられ、その方に相談すると、雨安居が明けると、タイ語のテストがあるということで、そのテストの後、片づけるということにいたしました。チャイ先生を始め、平田さん、となりのオーストラリア人、インド人。同安居のタイ人の世話になりながら日々是好日とばかりに楽しく修行させていただいております。

黒田様、ご家族の方々、善光寺の皆様、真野先生、関係各位の方々、皆様方のご支援とご協力のたまものと今さらながら感謝せずにはおられません。厚く御礼申し上げます。今後ともよろしく申し上げます。

まずは、お礼とご報告をかねて挨拶まで。
ワット・パクナムにて

十一面觀音像



沙門三喜花

善光寺霊園ニュース

横浜やすらぎの郷霊園

永代供養墓 善光寺やすらぎの碑

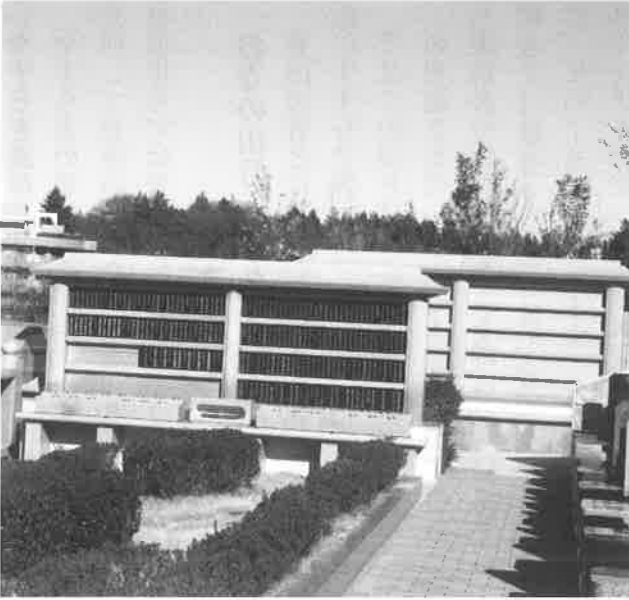
さきの見えない時代なのか、ご供養のあり方やお墓の継承についても従来のお祀りの仕方から個人の考え方に合わせて多様化の方向にすすんでいます。開園以来『本当に正しいものは時代が変わっても変わらない。』との理念をもつて運営するやすらぎの郷霊園。お越し頂くお一人おひとりころのやすらぎを感じて頂きたいとお参りのお手伝いをさせていただいております。

す。

昨今、永代供養墓『やすらぎの碑』の申込が多く、お名前をお彫りする墓誌が不足。ご安心頂きため、拡張工事をしておりましたがその工事も終了し、碑の地下納骨堂に向かう階段奥に新しく五百名分の墓誌を納める事が出来る墓誌台を設置致しました。

また、埋葬件数の増加に伴い、お参りする方も多く、時には、順番でお墓参りしていただくことや、花立てがいっぱいになることも多々ありました。ご不自由をお掛けしないように従来

の墓誌の前に香炉と花立てを設置いたしました。是非ご利用下さい。また、水場も新たに設置しました。



やすらぎ観音さま

墓誌の追加工事に伴い、一時お移り頂いていた『やすらぎ観音さま』が新たにA区に登るスロープ脇にご移転なされました。

お墓参りされる皆さまをやさしく見守って下さいます。



◇やすらぎ通信

やすらぎの郷では年四回『やすらぎ通信』を発刊してお寺の情報などを通知しています。昨秋彼岸号では晋山式について紹介しました。

お寺の山号（さんごう）について

晋山の晋とはすすむという意味があります。山にすすむで晋山式。

ではこの山とはなんでしょうか。

お釈迦さまのいらっしゃったインドのお寺は祇園精舎や竹林精舎などと呼ばれていました。精舎とは精進する修行僧の舎宅といった意味で、ビハラと言われます。（最近では仏教系のターミナルケア〔ホスピス〕を指す言葉として定着しています）お釈迦さまが人々を集めて説法をされた場所として有名な山は靈鷲山（りょうじゆせん）。ここで法華経や無量寿経をはじめ様々な説法がなされます。（お経とはお釈迦

さまがおっしゃったお話なんです）

インドではお寺を○○山と呼ぶことはありませんでした。中国では六朝時代を経て隋・唐の時代に仏教が栄えましたが、当時は権力者の庇護を受けやすい長安などの都市に建立される寺院と、反対に人里離れた山の中に建立される寺院とに大別されました。

時の皇帝による廃仏（仏教寺院への弾圧）があると、都市にあった寺院は荒廃しその数を減らし、反対に山中にある寺院が比較的影響を受けずに存続できました。

山の中に寺院を建立することが多かつた禅宗が宋の時代までに数を増やします。そしてその山の名前が地名として、お寺の名前の前に山号として付与されることとなります。

日本にもこの慣習が伝わり禅宗寺院を中心に山号をつけることになったと言われます。禅宗

伝来以前のお寺は山号がないお寺が多いのですが、実際に山の中に建てられていたお寺には山号が付いています。

日本には古くから山岳に対しての信仰が深く、山は霊山といわれるように自然の霊力を宿す神秘的な場所とされてきました。自然の驚異・畏敬の念を山に対して持ちそこで修行することによって身と心を清め修行力を得る。霊山に寺院を建立しその山の名を寺院名に加えることで自然の霊力で寺院を護り発展させようとしたとも考えられます。(現代のパワースポットです)

合掌

『やすらぎ通信』19号 平成22年秋彼岸より



成寿山善光寺(せいじゅざん ぜんこうじ)

善光寺の山号は成寿山です。成寿は「ナリス」とも読みます。この山号は、ナリス化粧品の創業者村岡満義先生と先代方丈様との御縁によるものです。先代方丈様が総持寺での修行時代に研修に來られたナリス化粧品の幹部社員の方々、に坐禅の指導をされたことがきっかけとなり、大阪の本社での坐禅会を経てお互いの結びつきはより深く太いものとなっています。

中でも、先代方丈と同じ歳の東郷敏先生(当時常務取締役)との御縁はまことに不思議な御縁であり、この御縁によって先代方丈様が善光寺を建立されることになるのです。総持寺からインド・タイ国への僧侶留学に際しても、またその後のアメリカへ開教師として渡る際にも村岡様にご支援を頂き、視野を世界に向けるその礎を頂くこととなります。

また、アメリカより帰国後に横浜の地に寺を

との話が上がった際にもナリス化粧品に多大なるご支援を頂きました。その当時の事を先代方丈様は次のように述べられております。(季刊誌『成寿』より抜粋)

「実はここにどうしても寺を興したいのです。どうしても此処で私の仕事として人心の救済をやらせて欲しいのです。でもお金がないんです。」単刀直入、ありのままを話す私に村岡社長、東郷氏は驚かれたようです。趣旨を理解された東郷氏は即断、すばらしい実行力ですぐに動いて下さったのです。

しかし私はその集め方に注文まで出してしまいました。「会社単位の大きなお金ではなく、一人ひとりの小さなお金を沢山集めていただきたいんです。期間は三ヶ月で。」と。私の無茶苦茶な注文にも『仕方ありません。何とか工夫しましょう』と。

やがてこの願いは大きな実を結び東郷氏の仕事柄全国津々浦々、北海道から沖縄まで私の面倒な頼みごとを快く引き受けて下さり、私の「趣意書」と東郷氏の「お願い文」が全社員、全取引先に向けて届けられることになります。二ヶ月後なんと、約千名にのぼる方から当時の金で一千万円。多大の浄財を喜捨していただくことが出来ました。善光寺の第一歩は人から人、心から心、魂から魂。数多くの尊いみ心のおかげで踏み出すことが出来たのです。

この年(昭和四十四年)の十一月宗教法人「善光寺」の認可を受け、村岡満義様を開基(寺の開創の基礎を作ってくれた人)、師父黒田白純大和尚を開山(寺の開創者)として勧請して発足したのです。」

また東郷氏は「とにかく先生(先代方丈)と付き合っただけからは私たちは追いまくられ先生が来られるとゾツとすることばかりが続く。けれ

ども社長が、先生の心意気、情熱に傾倒し何にも言わずにこの方に、この方にと、いうことでやっついていきますと、その心が会社の結束、ナリスの利益に還元され不思議とナリスは先生を知ることによってどんどん売り上げも上がり、利益も上げさせていただきました。

ですから先生とのご縁は更に深まり仏の道を通して先生はナリスの利益、貢献に大きくお力添えいただいたわけです。私たちは商人ですからきれいな心は持ち合わせておりません。でももうけたお金をどんどん人様のために使ってくださるのが先生だったわけでございます。」と述べられています。

善光寺の山号『成寿山』の由来は、尊い仏縁によるものでありました。またその縁を成就させたのは先代方丈の情熱と人様のために尽くすという誓願によるものであります。

様々なご縁・一期一会を大切に善光寺は歩み、今秋、三世博志方丈の晋山式を迎えます。

身を削り人に尽くさん

すりこぎの その味 知れる人ぞ尊し

合掌

〔「やすらぎ通信」19号 平成22年秋彼岸より〕



◇一口コラム

毎号「一口コラム」として仏教のお話を掲載しています。そのバックナンバーを一部ご紹介致します。

南無観世音菩薩

観音経というお経があります。正式には妙法蓮華経観世音菩薩普門品（みょうほうれんげきようかんぜおんぼさつふもんぼん）第二十五。その中ではお釈迦さまがなぜ観世音菩薩は観世音と言われるのかその因縁を説かれています。世の中の音を観る菩薩さま。世の中の苦しみ・悲しみの声、声にならない想いを聞き、一心に観音さまとお唱えすれば、必ず、観ていてくださる。救って下さる観音さま。

観音経に「悲観及慈観」（ひかんぎゅうじかん）という句があります。

慈悲の悲と慈ですね。慈悲とは「与楽拔苦（よ

らくばつく）与楽拔苦」の教え、喜びを与え、苦しみを抜く力と言われます。でも単なる優しさではありません。悲観から慈観まで。もう少し、細かく見てみましょう。

悲とはサンスクリットでカルナ。呻（うめ）きと意識されます。呻きを観る。悩んでいる、悲しんでいる相手の気持ちになる。なぐさめの言葉は簡単に言えるけれども本当に相手の気持ちになった時にはなにも言葉が出てこない。そんな経験はないですか。黙ってそばにいてくれる。それだけでもありがたい。人は悩み苦しんだ分だけ眼の色が深くなる、と言います。自分が悩み、苦しんだら、同じ思いで悲しみ、苦しむ人に手を差し伸べる。そういうことが出来る人になりたい。観音さまはそんな思いを、そんな自分をずっと見守って下さいます。

慈とはマイトリ。共に歩むと言う意味。仏道を共に歩む。お互いさまに手と手を携えて正

しい道を歩いていく。観音さまはいつも慈しみの眼で見つめて下さっている。正しい道を歩いているか、一日一日を大切に生きているか、自分の事ばかり考えていないか。しっかりと観てくださっている。私たちは大人になるにつれ叱ってくれる人が少なくなりませんが、観音さまは時に叱ってくださいている。そんな気がします。「喜びは二人で喜べば倍になり、悲しみは二人で悲しむと半分になる」

一人ではないんだよ。観音さまが観ているよ。今年一年も一日一日をしっかりと共に歩んで行きましょう。

合掌

『やすらぎ通信』20号 平成23年正月号より

秋深き 隣は何をする人ぞ

やすらぎの郷のお墓の周りを歩いていると、「和」や「絆」の一字を刻んだお墓を数多く目にします。

「和」はやわらぐ・なごむとも言います。角たたず。まるくおさまる。転じて分離しないという意味もあります。「絆」はつながり。その由来は、糸の両方の端をお互いに切れないように持ち合うといった意味があります。お互いにつながっている。きずなという字は「継」とも書きます。世の中・社会とつながっているという意味でしょうか。

今年の夏は特に家族の「和」・「絆」について考えさせられる夏でした。親であり子であり、耳を疑う事件が報道され自然と涙が流れてくるそんな日々がありました。人はひとりでは生きていけない。あたりまえのことが、置き忘れられているような中、NHKで放映されて話題となった無縁社会という言葉があります。平穏に生活していても病気や退職など、ふとした事で社会とのつながりが途切れ、言いようもない孤独感にさいなまれ、自分の存在感に疑問をもつ

てしまう。そんな不安がどんどん広がっている。社会とのつながりがいつ切れてしまうかわからない不安……。

先日、仏教電話相談で「無縁社会について、明日の私かも知れない」と言って電話をかけてきた方がありました。ひと通り現在の不安な気持ち（連絡の取れない子供。年に一度会うかどうかのお隣さん。大病をされたご自分の健康への不安。経済的な不安など）をお話されました。いろいろお話を聞くうちに、「それでも面白い物に出かけた時、お店の人に『お元気でしたか。』とお久しぶりですね。大丈夫ですか？」と声をかけてもらえるとその一言で明日までまだ生きていけると思える」とおっしゃっていました。お互いに忙しい中でも、生活のゆとりが少なくなっても、なにげない一言が切れかけていた縁を結びつける、社会とのつながりを思いださせる方法なのでしよう。

この方の話を伺って、今は苦しみの中にいらっしやるあなたでも、今度は、あなた自身がその一言をかけられるように一歩ふみだして欲しい。きつと大丈夫。そう受話器越しに祈りました。

たいしたことは出来ないけれど身の回りから一歩、一歩ですよね。

陽がだんだんと短くなる秋の頃。親や子。お友達にお隣さん。兄弟や親戚、顔見知り。誰かの声が聞きたくなるそんな秋の夜ですね。

合掌

〔「やすらぎ通信」19号 平成22年秋彼岸より〕



タンブンのこころ

タイは国民の九〇%以上が仏教徒といわれる程の仏教国です。

早朝、まだ薄暗く霧の立ち込める中、托鉢にまわる僧侶の列。そして、彼らに供物を施す人々の光景。それはお釈迦さまがいらした二五〇〇年以上前の光景のようでもあり、時を越えてもなお、タイ民衆の心の中にその教えが生き続けているようです。

お釈迦さまは、「あらゆる存在は生滅変化して、永遠に存続するものではなく（諸行無常）全ての存在は網の目のように結びついた縁起の存在であり（諸法無我）、自分の思い通りになるものは無く（一切皆苦）であり、煩惱を断じ、真理と合一した境地、涅槃こそが理想の境地である（涅槃寂静）」と説かれました。

布施を行い、執着や煩惱を捨てて正しく生きること、苦の世界から解脱することができる

とタイの人々は考えます。このことをタイの人は「タンブン（積善）」（タンは積む、行う、ブンは功德の意味）といい、小さな種が大きな樹木となるように、ささやかなりとも精一杯の供養の種を蒔けば、必ず大きな幸福が約束されることを深く信じて生きているのです。

特に仏法僧の三宝に供養することを重視しています。タンブンの中でも最高にして最善の行いとされているのが、出家することで、男子は成人すると出家する習慣があるのはそのためなのです。女性は「メーチ」と呼ばれる女子修行者にはなれても出家して僧侶となることはできないため、托鉢僧に喜捨することでタンブンします。

施しを与えるというのではなく、「タンブンをさせていただき救われました。心から感謝いたします。」という気持ちの持ち方が、どれほどタイの社会を穏やかに、心豊かにし、人々の目

を輝かしていることでしょうか。政治や治安の問題もあります。タイの人々の純粹な信仰心はタイの魅力のひとつであり、続けて欲しいと願います。

「布施というは不貪なり。不貪というはむさぼらざるなり。むさぼらずというは世の中にいふへつらわざるなり。」(正法眼蔵 四摂法)

と道元禅師様は示されます。人の目を気にして行うのではなく、自分のこころの自由・こころのやすらぎを得るために行う功德・布施行。

普段の生活の中で特別なことではなく、何もなくとも心の持ちようで出来る無財の七施を紹介します。

- 眼施(優しい眼差し)
- 和顔悦色施(ニコニコ笑顔・口角(唇の端)を五ミリ上に上げてみて)
- 言辞施(慈しみの言葉 愛語 明るく挨拶)
- 身施(その優しい心を行動でボランティア)

○心施(まろい心・ひろい心・ほとけの心)

○床座施(電車で、バスで、席の譲り合い)

○房舎施(困っている人がいたら宿を貸す)

(『雑宝蔵経』より)

どれかひとつでも、毎日少しでも実践したいと思えます。

合掌

『やすらぎ通信』18号 平成22年お盆より



三輪身(さんりんじん)

〱 仏さまの三つのお顔 〱

お不動さまは大日如来の化身と言われます。この化身とは何か。仏教では三輪身という考え方をします。

まず大日如来のお姿は自性輪身(じしゅうりんじん)。自性とは自ずからなる性格、性質のこと。輪とは法輪、つまり仏法のこと、身は身体のこと。つまり天地自然ありのままの姿を示す仏のことを自性輪身と言います。大日如来は太陽に譬えられます。私たちは太陽がなくなってしまうたら、生きていくことは出来ないのです。すがあまりに当たり前で、そして偉大過ぎて太陽に甘える気持ち起きません。この自性輪身を見て悟れる人は優秀な人で、一般の人には取り付く島がないとも言えます。

昔ある人が明恵上人に自分の運の無さを嘆き何とか運が開けるようにと頼み込んだところ明

恵上人は「私は朝夕すべての人々が幸せになるように祈禱している。さだめしあなたもその中に入っているはずだから別に祈る必要はない。また叶うべきことなら叶うであろうし、叶わないことなれば仏の力も及ぶまい。身を正しくして在るべきようふるまえば神仏は護りたまい、願望は成就するであろう」と諭されたそうですが、そう言われて「はい、わかりました」と気持ちの整理の出来る人は少ないですね。そこを何とかと、願う心があるから正月そうそう神社仏閣にお参りする人が多いわけですね。「今年こそは……。私だけには……。何とか……。」

その様な我々の願いに答えて仏さまは優しい菩薩の姿を表すのです。それを正法輪身(じょうぼうりんじん)と言います。正法とは正しい仏法のこと。正しい仏法をわかりやすく説いてくださるお姿のこと。自性輪身である大日如来

は正法輪身として般若菩薩さまの姿を表します。菩薩はいわば母親の姿。子供の甘えを優しく受入れその甘えの中から伸ばすべきものは伸ばし、矯めるべきものは矯めてゆくように、やさしく衆生を導いてくださるのです。

ところが子供は成長するにしたがって、ともするとやさしい母親を甘く見ていう事を聞かなくなります。そこで必要になってくるのが父親の厳しさです。子供の教育にはやさしい母の愛情とともに父の厳しさがなくてはならないといわれますが、それと同じようにやさしい菩薩の教えに耳を貸さないで、悪事を重ね、いよいよ仏から遠ざかってしまう人もいます。そこで憤怒の形相をもって是が非でも引つ張ってゆく導き方が必要になってくる。そのお姿を教令輪身（きょうりょうりんじん）といいます。教とは教え。令とは命令の令。命令、号令で教え導くという意味で大日如来は教令輪身としてお不動

さまの姿を表すのです。円満崇高な自性輪身では近寄りがたく、柔和な正法輪身では甘えてしまふ。そこで憤怒の形相のお不動さまの出番となるのです。

我が身を見る者は 菩提心を發さん

我が名を聞く者は 惑を断ち善を修せん

我が説を聞く者は 大智慧を得ん

我が心を知る物は 即身成仏せん

〔『聖不動經』〕

合掌

〔「やすらぎ通信」16号 平成22年正月より〕





坐禅会・写経会のお知らせ

坐禅会

善光寺では毎月第一日曜日の早朝六時からと、第四日曜日午後三時から坐禅会を行っております。

早朝坐禅の後は、朝のお勤めをし、その後、禅寺の作法に従って、お粥を召し上がっていただきます。

午後の坐禅会は、坐禅を二炷。そして、正法眼蔵随聞記を皆で読み、高祖様の教えに親しんでおります。

これまでに坐禅の経験のない方、初心者の方



のご参加もお待ちしております。お気軽にご参加ください。

平成23年 善光寺坐禅会 年間予定表

■早朝坐禅会 毎月第1日曜日午前6時から

1月は、お休みです。	7月3日（ 〃 ）	午前 5:45 集合 6:00～ 坐禅・読経 7:00～ 朝食(お粥) 7:30～ 解散
2月6日（日曜日）	8月7日（ 〃 ）	
3月6日（ 〃 ）	9月4日（ 〃 ）	
4月3日（ 〃 ）	10月2日（ 〃 ）	
5月1日（ 〃 ）	11月6日（ 〃 ）	
6月5日（ 〃 ）	12月4日（ 〃 ）	

■日曜坐禅会 毎月第4日曜日 午後3時から

1月23日（日曜日）	7月24日（ 〃 ）	午後 3:00～ 体操(体ほぐし) 3:20～ 坐禅 4:00～ 経行 4:40～ 坐禅 5:00 閉会
2月27日（ 〃 ）	8月28日（ 〃 ）	
3月27日（ 〃 ）	9月25日（ 〃 ）	
4月24日（ 〃 ）	10月23日（ 〃 ）	
5月22日（ 〃 ）	11月27日（ 〃 ）	
6月26日（ 〃 ）	12月25日（ 〃 ）	

場所：善光寺 釈迦殿

費用：無料

服装：ゆったりとしたもの。靴下は履きません。時計やアクセサリーは、はずしてください。

※ 参禅ご希望の方は、前日午後7時までにご連絡下さい。

写経会

お写経は、自らの信仰を深めるだけでなく、ご先祖の追善、あるいは諸願成就の祈りを込めて行う一つの修行です。

善光寺では月一回、左記にて「写経会」を開催中です。

どうぞご参加ください。

【日時】 毎月第四金曜日（六月・九月は休み）

午後二時より一時間半

【場所】 善光寺不動殿

【読経】 「般若心経」を全員で看読

【写経】 引き続きお写経「般若心経」

【費用】 無料

平成23年

善光寺写経会年間予定表

1月28日（金）	7月22日（金）
2月25日（ㇿ）	8月26日（ㇿ）
3月25日（ㇿ）	9月は、お休み
4月22日（ㇿ）	10月28日（ㇿ）
5月27日（ㇿ）	11月25日（ㇿ）
6月は、お休み	12月23日（ㇿ）
午後	
2：00～	読経「般若心経」
2：10～	写経
3：20～	読経
3：30～	解散

※お手本・筆・硯・墨・写経用紙なども一式準備します。ご自分の道具を持参されても結構です。

※参加の方は準備の都合上、前日迄にご連絡下さい。

坐禅会・写経会ともに連絡…

善光寺 横浜市港南区日野中央一十二一九

(〒二三四一〇〇五三)

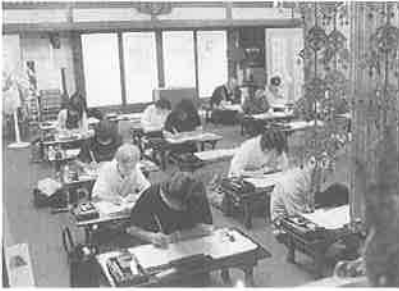
電話：〇四五―八四五―一三七一

FAX：〇四五―八四六―二〇〇〇

Eメール：info@zenkouji.net

URL：http://zenkouji.net

※参加の方は準備の都合上、前日迄にご連絡下さい。



育英会寄付者

■平成二十一年度

南 区 松本 文彦殿
 西多摩郡 宮田林産(株)殿
 神奈川区 滝沢 孝子殿
 磯子区 瀧澤 武雄殿
 港南区 南 有里殿
 世田谷区 富田 繁殿
 磯子区 中村 茂子殿
 那須塩原市 太田 正孝殿
 港南区 貞 昌 院殿
 港南区 増山 静江殿
 芦屋市 東郷 公殿

戸塚区 岩波 弘道殿
 港南区 星野 一男殿
 南区 大森キク工殿
 港南区 勾坂 真殿
 港南区 小林 久子殿
 港南区 小森キク工殿
 平塚市 山口 義男殿
 熊谷豊太郎殿
 神奈川区 滝沢 孝子殿
 大田原市 黒田美代子殿

■平成二十二年度

土浦市 大野 正殿
 金沢区 高橋 則孝殿
 南区 赤峰 孝子殿
 鶴見区 三宅 正吉殿
 港南区 桂川 正克殿
 港南区 磯子区 越石 重博殿
 南 有里殿
 西多摩郡 宮田林産(株)殿
 高槻市 東郷 敏殿
 大田原市 光 真 寺殿
 川崎市 宮田 富夫殿
 磯子区 下田 恒治殿
 都筑区 阿部 匡宏殿
 港北区 瀧澤 武雄殿
 港南区 柏 市 伏見 邦弘殿
 港南区 鳥居 秀行殿

港南区	新宿区	戸塚区	緑区	磯子区	旭区	磯子区	港南区	都筑区	豊島区	町田市	港南区	台東区
貞昌院殿	東亜建設工業殿	富士佳代子殿	豊島節夫殿	太田和子殿	河村久子殿	増田京子殿	千葉佳子殿	唐戸清子殿	新井正枝殿	鈴木幸雄殿	(株)せんざん 山泉篤殿	(株)翠雲堂 山口肇殿

港南区	世田谷区	芦屋市	戸塚区	新宿区	金沢区	滋賀県
増山静江殿	富田繁殿	東郷公殿	荻野幸子殿	吉田日光殿	山本浄月殿	田中智誠殿

〈成寿賛助〉

■平成二十二年度

港南区 貞昌院殿

ありがたいご寄付を賜り、
誠にありがとうございました。



一斉法要のご報告

善光寺では年に五回（一月、二月、三月、六月、九月）一斉法要を執り行っています。

毎回三百名を越す方々にお集まり頂き一緒にご供養を申し上げます。檀信徒の方にはその都度ご通知をさし上げております。日常にこころやすらぐひと時を。

ご都合のつく方は是非ご参詣下さい。お待ち申し上げます。

【平成二十二年】

一月九日（土） 新年祈禱会

臨済宗多福院住職の島崎義孝師によるご法話。師は善光寺留学僧育英会の第三回育英生で昭和六十二年、ニューヨーク禅センターに渡り

ニュー・アラカルト



ご修行されました。その頃の思い出を先代方丈や前角老師の話を変え、また現在大阪藍野学院短期大学の看護科で教鞭をとられている経験などのお話を頂きました。

大般若祈祷、恒例の福引の後には、お檀家の佐々木さんによる三味線や民謡で賑やかなひと時を過ごしました。



— 二 五 — ス ・ ア ラ カ ル ト —

二月三日（水） 節分追儺法会

今年より桐元老師の後を受けて院代の役となつた前平武男師が、在家出身ながら、僧侶になつたいきさつ、いまここに至るまでのご縁について、「牛に引かれて善光寺参り」などの例えを紹介しながら、縁起についてのお話をされました。



大勢の僧侶による除難招福のご祈祷の後、恒例の豆まきが行われました。

三月十九日（金） 春彼岸法会

昨年の秋彼岸に続いて浄土宗乗雲寺安井住職のご法話を頂きました。

好評だった前回にも優る内容であつという間に時間が経ちました。「孝」という字は老いた



ニユース・アラカルト

親を背たろうて行く子供の姿を表した漢字である」と紹介され、後ろ姿で幸せの種を蒔く事の意味をお話されました。知覧特攻隊のお話のくだりでは涙ぐむ方も多くおられました。

六月二十五日（金） 二十六日（土）

孟蘭盆大施食法会

毎年この時期に二日間に渡り、孟蘭盆大施食法会を執り行っております。

駒澤大学名誉教授の佐々木宏幹先生から「供養のころについて」と題するお話を頂戴しました。

九月二十一日（火） 秋彼岸法会

駒澤女子大学教授の安藤嘉則先生による般若心経のお話。坐禅の呼吸法にも触れ、腹を意識した呼吸を紹介いただきました。

宝寺前住職）と共にそのご恩に感謝申し上げ焼香をしました。

保春寺三十一世中興

大嶽春邦大和尚

世寿七十二歳



善寶寺山門前にて（成寿39巻より）

ニユー・アラカルト

山内整備

晋山式を迎えるにあたり山内の整備が進められました。

不動殿の預骨堂の移転。渡り廊下の大黒尊天のすぐ裏にありました預骨堂を本堂東室中（右奥）に移転しました。この移転に伴い同室にはご開山さま並びに開基家のお位牌もお祀り申し上げ、日々ご供養させて頂いております。

法要などが行われている時でもゆっくりとお参りして頂きます。

また、畳の張替えや天蓋のクリーニング、釈迦殿のエアコン取替、トイレ改装やカーペットの張替えなど十数年に一度の整備も合わせて行いました。

仏具としては太鼓を総代・役員をはじめ護持

会からもご寄贈頂きました。ありがとうございます。



ニ ュ ー ス ・ ア ラ カ ル ト

先代方丈の肖像画

この度の法要にあわせて先代方丈の肖像画が先代方丈の実弟 群馬大学教授 黒田能勝先生から寄贈されました。

七回忌法要の当日は、本堂に安置してお参りをさせていただきました。(〓本誌巻頭カラー頁に掲載)

現在は、不動殿にて御開山棟庵白純大和尚の肖像画と並んでお祀りしております。観れば観るほど先代方丈さまの慈愛に満ちたお人柄が偲ばれます。

上山。修行僧の前でこれから共に修行をしていきたいと就任の挨拶をされた。

加賀大乘寺は規矩大乘（きくまいじょう）と言われ、行持綿密に修行されている曹洞宗の名刹。

博志方丈は「謙虚・実直な人柄で共に仏法を学び、実践していく者同士」として修行僧教化に対する意気込みを語った。

◇「規矩」とは：規はコンパス、矩は物差しの意で、手本となる規則のことを意する。

特に曹洞宗では「威儀是仏法、作法是宗旨」と言い、服装や日々のふるまいにこそ仏法があるといわれる。その日常の規則を「規矩」と呼ぶ。

規矩大乘とは大乘寺がそれだけ厳しい修行をされている事を示している。

— ニュース・アラカルト —





沙門
三善堂
印

〔目的〕

仏教を修学する者のうち、学業操業ともに優秀にして身心堅固なものを海外に派遣し、または海外より日本国内に受け入れ、佛教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る有為な人材を育成することを目的とする。

〔派遣先〕

1. Zen Center of Los Angeles (LA 禅センター)
"923 S.Normandy Ave., LA., CA90006U.S.A"
2. Zen Mountain Center of NewYork (NY 禅センター)
"Box197,Mt.Tramper,NY12547U.S.A"
3. Zen-Zentrum Eisenbuch (アイゼンバッハ・禅センター)
"Eisenbuch 7 D-84567Erlbach Deutschland Germany"
4. WatPaknam (ワットパクナム)
"Bhasichareon Bangkok, 10160 Thailand"
5. 理事会において必要と認めるその他の国に所在する研究機関、並びに国内仏教関係大学及び寺院

〔派遣期間〕

平成24年4月より1年間

〔給費〕

アメリカ・タイおよびその他の国における滞在に要する
必要経費並びにその往復旅費

〔提出書類〕

1. 論文 (次項による)

○論題

- ①これからの国際興隆と仏教の役割
- ②世界平和と仏教徒の誓願
- ③留学僧として私はこれを学びたい
- ④異文化の中で仏教を学ぶ

いずれか一題を選ぶこと 400字詰原稿
用紙5枚以上 (A4判タテ書き)

2. 保証人と連署した願書
3. 卒業証明書
4. 履歴書
5. 推薦書
6. 健康診断書

〔募集人数〕

平成23年度若干名

平成23年12月10日、事務局必着のこと

〔発表〕

平成24年1月10日、本人に通知する

横浜善光寺留学僧育英会

〒234-0053 横浜市港南区日野中央1丁目12番9号
TEL.045-845-1371 FAX.045-846-2000

第 25 回 生

横浜
善光寺

留学僧募集

平成24年度・2012

横浜善光寺留学僧育英会は、海外留学僧を募集いたします。

ご希望の方はご応募ください。

詳しくは、宗教法人横浜善光寺留学僧育英会の
規程ならびに細則をごらんください。



ZENKŌJI
YOKOHAMA




読者のたより

お志が見事に受け継がれ

大乘寺山主 東隆眞老師
石川県

「成寿」第四〇巻たしかに
拝受いたしました。先代老師
のお志が見事に受け継がれて
いることを目の当たりに拝見
いたし、嬉しいかぎりです。
本年は先代様の七回忌に拝
登焼香いたします。
御母上様をお大切にお大切
におねがいたします。

斉藤老師の遷化 驚きました

前田恵學先生
愛知県

御誌「成寿」四〇巻によつ
て斉藤信義老師のご遷化を知
りました。大学で同じ研究室
の大先輩で、大変親しくして
いただきましたので、誠に残
念です。かつて善寶寺様やご
自坊にお伺いしたことなど思
い起こしています。

一〇四頁に私の名前を発見
いたしました。有難う存じま
した。

※先生は平成二十二年十月三十一
日、八十四歳にて遷化なされました。

ここに生前のご法愛に深謝し謹んで哀悼の意を捧げます。

日々御活躍の御精進

静岡県

聚光院伊東別院住職

小野澤寛海老師

今年残り少ない月日となり一年の総決算を考える時となりました。先日師の機関誌「成寿」第四〇巻拝送賜り深謝いたします。

仏法興隆の為、日々御活躍の御精進誠に有難く存じます。無音の折、深謝申し上げます。同様家族のこと等、お会いしてお話し申し上げたいことばかりです。来年は良き年であ

りますよう右はお礼旁々お知らせ迄。

実相には生も死も

静岡県

少林寺住職 井上貫道老師

いつも善光寺の季刊誌をありがとうございます。今回最初に目に飛び込んで来たのが副貫首斉藤信義老師の計報。

人間に限っていえば、死ぬることが最初から間違いないと解っている上で人は生きる。どんなに医療が発達し、手術が成功しても死はさけられない。生きることだけをしっかりとやれば後は気にせずとも必

ず決着が着くのに、死ぬことが気にかかる。いつからか人間は死という既成概念をいだいて悩まされる動物になったのでしょうか。

実相には生も死もついていないのに、文字で表記され更に確たる思想観念となつて人にとりついた悪夢であれ好夢であれ夢から覚め、覚めた人となることは現代の急務であろう。宗教者がこれを率先理解して教化したいものです。

ご自愛を祈ります

山梨県
延命院住職 神田重陽老師

善光寺季刊誌「成寿」第四
○巻戴きありがとうございます。ま
した。拝読させて頂きます。
寒気の折、ご自愛祈ります。

過分の御祝儀、恐縮です

石川県
森雅秀先生

立春を過ぎても寒い日が続
いておりますが、益々御清祥
のこととお慶び申し上げます。

先立っては拙著上梓に過分

の御祝儀を賜り、恐縮してお
ります。まことにありがとうございます。
ございました。浅学非才の身
ですが、これからも仏教学の
進展にいささかなりとも寄与
出来るよう、精進する所存で
おります。引き続きご指導ご
鞭撻賜りますよう、よろしく
お願い申し上げます。

貴育英会の益々の発展と、
檀信徒様の皆様のご健勝を心
より祈念いたします。何かお
役に立てることがございまし
たら、何なりとお申し付け下
さい。

時節柄、お風邪などを召さ
れませぬよう、ご自愛下さい。

肺ガンにも負けず

横浜市
三宅正吉様

御住職には御健勝にて正法
におはげみ下されることによ
ろこばしく存じます。故大圓
大和尚さまのおみちびきによ
り、大本山総持寺三宝殿で仏
道にお導き頂いて以来、南無
釈迦牟尼佛をお唱えさせて頂
くことにより、肺ガンにも負
けず今日を幸せに過ごさせて
いただいております。平成二
十二年は御住職様におかれま
しては、晋山式をお迎え下さ
れる誠に意義深い年と「成寿」

の文により知りました。益々
正法の隆盛なることを御期待
申し上げるところです。益々
の寺院の隆盛を申し上げつつ
私の新春の喜びといたしま
す。

国際交流が求められる

千葉県
久保田展弘様

この度は季刊誌「成寿」第
四〇巻ご恵与賜りましてあり
がとうございました。善光寺
海外留学僧派遣育英会のご発
展は、まさに国際交流が人間
に求められる今日、まことに
貴重なご活動と存じます。

成寿山善光寺の一層の発展
をお祈り申し上げますととも
に、今後ともご教導賜ります
よう念じ上げます。

諸法要行事等に対し敬意

神奈川県
渡辺照夫様

師走の候、善光寺様には
益々ご隆昌のこととお慶び申
し上げます。

先日は善光寺季刊誌「成寿」
第四〇巻をご送付賜り何時も
乍らのご配慮有難くお礼を申
し上げます。

大圓武志大和尚のご遺志に
なる諸法要行事等の実績に対

し衷心より敬意を表します。
厳寒の折柄、ご一統様のご
健勝をお祈り申し上げお礼の
ご挨拶と致します。

師父時代の編集と遜色なく

横浜市
戸塚正美様

「成寿」拝読、師父時代の
編集と遜色なく、立派な寺報
です。廃刊になるのではない
かと心配していましたが、軌
道に乗って良かった。もう大
丈夫ですね。

六日には駒大三心会も善寶
寺に伺い、お元気な斉藤信義
老師に拝謁できて、喜んでお

ります。善光寺の団参といい、まるでご老師がお呼び下さったようで、十一月の遷化の報にびっくりしました。小生、「大雄」誌の編集も十二年になります。お互い継続することの意義をかみしめて頑張りますよう。

育英会再出発の特集号

東京都
磯村啓子様

「成寿」第四〇巻御送り頂きまして有難うございました。今号は三年振りの育英会再出発の特集号ということで大変充実した内容を拝読致し

ました。

先代方丈様の御意志を承け本育英会が永らく継続されますことを希っております。目には見えぬ人の種を世界に蒔かれた方丈様のお心は久しく引き継がれていくものと確信いたします。

どうぞよいお年をお迎え下さいませ。

行動力に感心

千葉県
村田一夫様

拝復

暮冬の砌、平成乙丑の歳も已に師走は末の八日歳の瀬何

かと慌ただしい日々をお過ごし
の御事と拝します。此の度は「成寿」第四〇巻冬季号を御恵贈に預かり頗る恐悦至極に存じます。「成寿」は善光寺様の一年間の動向がよく窺え込みいい冊子に仕上がっております。長く継承しておられるその行動力に感心しております。

本年も最早余日少なく相成りました。御機嫌麗しく御越年ください。

右、御礼少々御挨拶を申し上げます。

スカウトもお利口に座禪

横浜市
葛西映子様

善光寺ご住職様、皆様

今日は本当にありがとうございます
ございました。

お寺での座禪、スカウト
達・リーダーにとっても初め
での経験でした。八四団の小
さいスカウトもお利口に座禪
できたのにはびっくりしまし
た。朝から二十分間の静かな
精神統一は、とてもすがすが
しい思いました。ご住職のお
話も楽しく、皆耳をかたむけ、
声を合わせての読経も身が引

きしまりました。すばらしい
経験をスカウト達にさせるこ
とができ、またカブスカウト
達にはお数珠までいただき、
とても感謝しております。来
年もぜひ伺いたいと思ってお
ります。ありがとうございます
です。

南インドの達磨大師の地に

横浜市
太寧寺住職 山本浄月様

暑中御見舞申し上げます。
皆様お元気で御活躍のほど
お喜び申し上げます。この度
は育英会の第二十四回生の募
集の資料一式を御恵送賜りど

うも有難うございました。

先般の私共の禪宗の初祖
「達磨大師」の顕彰碑の開眼
法要の件の資料を同封させて
頂きます。私は御生誕の地、
南インドのカンチープラには
二度ほど訪れたことがありま
すが、達磨大師の記念碑は一
つもなく、北インドの釈尊の
地には皆様行かれますが、南
インドの達磨大師の地には禪
宗の方も行く方はあまり居ら
れませんでした。

私はほんのわずかなポケッ
トマネーから少しずつ十数年
かけて積んだ資金で小さな碑
でも建てて頂くべく誓願を立
て、マドラスで「アジア文化

研究所」を建てて十三世紀頃まで南インドにあった仏教や仏像等を掘り起こして活動しておられた彦坂周仁師（現在日本に帰って豊橋の多聞寺住職をされています）にお願い

してやっと成就いたしました。南インドはアーリヤ系ではなく先住民のドラヴィダ族のタミール系です。それ故アーリヤ系釈尊と達磨大師（二十八代目）は顔立が少し異なっています。

今回の碑建立にあたって私はひざ痛のため出かけられませんでした。マドラス市は現在チェンナイ市となりこの十年間でIT産業の一大工業団

地となり草ばかりの原っぱや空地の多かった郊外は産業道路やビルが立ち並び大発展しているそうです。私もまたまテレビで日本の企業も進出している様子を見ました。

達磨大師が中国に向けて船出をしようと云う港も大体つきとめたと彦坂先生は以前おっしゃっていました。現在の建設ラッシュではブルドーザーでつぶされかねないので安全な場所を求めて「テオリフィカルソサエティ世界本部」の敷地内にお願ひするのが出来た次第です。将来どなたかの志にあずかればもつと立派な達磨顕彰碑にもなつてゆくこ

と信じささやかながら何とか建立できました。一応ご報告まで。

盛夏の砌、何卒皆様ご健勝にて益々のご活躍、御発展の段、祈念申し上げます。

いつもながら優しい笑顔

小野義彦様

釈尊の御般涅槃を謹んで、お偲び申し上げます。今日この頃、御山内の皆様に於かれましては、益々御清祥のことと、心より御慶び申し上げます。

先般は、突然の事にもかかわらず、いつもながらお優し

い微笑みをもって御接待を賜り、心のぬくもりをあらためて感じるひとときを送らせて頂きました。加えて過分のお布施をお預かり致しまして、何から何まで感謝感謝でいっぱいです。

その後、十一月にはブツダガヤ日本寺にて、約一週間の坐禅会を、駒澤大学名誉教授小笠原隆元先生を招き、無事に修行することが出来ました。これもひとえに善光寺様はじめ、皆々様の励ましがあって円成したことで、仏縁に深く感謝申し上げます。

当チエンマイでは、毎朝の

小食供養にて、愚僧の前にひざまづき、手を合わせ祈る人たちの美しい御姿そして美しい笑顔に、布施行の尊きを身にしてみte感じております。有難い修行の毎日です。

今、こちらでは、穏やかな暑さの日々の中、色鮮やかな熱帯性の花々が目を楽しませてくれ、小鳥の歌を聞きながら、さらに木々の木の葉ずれが耳にさやさやと囁きかけてくれます。花々の燃える命に、心がさらに明るく照らされる思いです。

来月から、再び日本各地を行脚致しますが、さらに精進を重ね、また歳も重ねつつ、

ひとり旅を続けようと思っております。

それでは、御山内の皆様の益々の御多幸を心より祈念申し上げます。

一、雲海の 小鳥の浜の 白砂の 踏みしむ音の 心地良き哉

一、白砂の 尊き命 数えても なお数えても 何時終るらむ

(馬骨禅馬)



編集後記

▼成寿四十一号予定通りの発刊となりありがたいと思っております。あらゆる方面より、ご至誠ご協力を頂き厚く厚く御礼申し上げます。

▼昨年十一月二十七日二十八日の晋山結制と師父の七回忌法要、寺にあって、檀信徒の皆さまにとつて再びない行事。準備から終了まで多くの方々にご尽力を頂きありがとうございました。

▼実行委員長をお勤め頂きました善光寺筆頭総代熊谷豊太郎様は、満九十四歳。豊饒と全くお年を感じさせないバイタリティー。この方がいては「私はもう年です」これは禁句です。式典から最後のご挨拶まで誠にありがとうございました。

▼安下処としてお世話くださいました総代の鳥居秀行様ご家族の皆様、まことにありがとうございました。安下処が晋山結制の起点、すべては

じまりはここからでした。

▼準備から設営と周辺の整備一切を完べきに尽くして下さいました(株)板橋の社長様、はじめ役職社員の皆様方、本当にありがとうございました。色々な問題が山積しておりましたが、みなさまの経験と技術と実績で見事解決。とても心強く、安心して本番を迎え、終わることができました。

▼はじめは参加くださるものか案じていましたが、不安はとんで四十名のお稚児さん。当日の着替えや冠、小道具、日頃手にしないものばかり。山内スタッフの皆様、ご家族の皆様のご協力のおかげで予定通り出発することができました。

▼祝賀会で来賓の方から「新命住職をみんなで支え、それぞれの役割と責任が光っていた。力を合わせている姿に感銘した」六年振りのご参加のお方が「チームワークの善光寺だ。さすが大圓和尚だな」と。本当にありがたいお言葉。感謝合掌です。

▼坐禅会で御指導頂きました藤田老

師。老師渡米の都合により師によるご指導はしばらくありません。しかし坐禅会は継続しています。老師にご指導いただいたことを大事に坐禅をしていきます。引き続き育英会の参与として、今後のご指導併せてよろしくお願い申し上げます。

▼今年の新年祈祷会、東郷総代より「トイレの神様」のお話を伺い、善光寺では競ってトイレ掃除をしております。ピカピカです。みんなきれいなーれ！

▼今年も五月二十八日、不動明王大祭を勤めます。どうぞご自由にお参り下さい。

成寿 第四十一巻

平成二十三年三月二十三日発刊

発行所 成寿山善光寺

横浜市港南区日野中央二丁目

十二番九号

電話 〇四五(八四五)二三七一

FAX 〇四五(八四六)二〇〇〇

印刷所 (株)中外日報社





横濱善光寺